

2026年度

東京科学大学 理学院

化学系

Department of Chemistry
School of Science



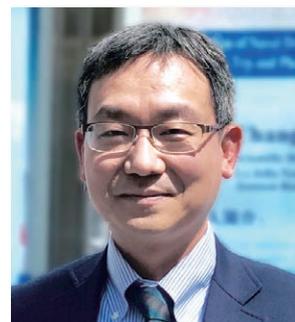
Institute of
SCIENCE TOKYO

科学大 化学系

🔍 検索

巻頭言

私たちの身の回りのすべては物質から成っています。私たち自身も物質で作られ、私たちの思考さえも物質の働きの一つとして理解されようとしています。物質の有り様とその変化を支配しているのは、原子・分子およびその集合体の構造と電子の振る舞いです。化学は、この「電子・原子・分子とその集合体を支配する原理」を明らかにし、この原理に基づいて新しい物質を設計・合成し、新しい物質の世界を創造することを目指す学問です。その意味で、化学は物質が関係する全ての自然科学分野の中心に位置する学問領域、すなわち「セントラル・サイエンス」であると言えます。



人類はこれまで多くの問題を科学の力で克服してきましたが、環境問題、エネルギー問題、医療問題など、新たな問題に私たちは直面しています。これらは相互に複雑に絡み合い、イデオロギー対立などに利用されることにより、安全保障問題などにもつながる深刻な問題となっています。そして、IT化とグローバル化が進んだために、これらの諸問題は私たちの本当に身近な問題になっています。これらの問題の根本は物質に関わっていると言えます。環境問題は化石燃料からの排出ガス、微粒子排出や産業廃棄物の問題などが挙げられ、これを解決するには触媒や環境負荷の少ない化学合成法の開発など物質変換の原理に基づく化学の力が必要です。エネルギー問題では、核融合技術が着実に進歩しているものの商用発電にはまだ遠く、蓄電池技術、燃料電池、光触媒の開発による水素エネルギーの実用化などが喫緊の課題です。これらの新技術の開発のためには、物質の多様性に基づく化学の基礎概念の発展と新発想の創出が不可欠です。そして、原子・分子一つ一つに機能をもたせ、有用な機能をもつ集合体を原子・分子を組み合わせて自在に作り上げ、その電子状態を制御して有用な物質を創出することが必要です。医療問題では、感染症問題が我々の日常を一変させてしまいました。新しいワクチンや治療薬の開発には、遺伝子・タンパク質などの構造や機能の分子レベルでの解明に基づく新薬の開発が必要です。また、これらの技術はこれまで治療が難しかった重篤な病気の克服にも新たな可能性を拓いています。

化学系では、このような原子・分子とその集合体の振る舞いを支配する原理を探求し、物質の個性や多様性をより深く理解するとともに、その原理を自在に応用・展開して新分子をデザインするなど、物質科学の発展に貢献することを目的として教育・研究を行っています。カリキュラムは、皆さんが幅広い学問の基礎を身に付け、より専門的な内容を学修し、将来そのフロンティアを私たち教員、学生および国内外の研究者と協力して切り開いていけるように構成されています。また、化学コースだけではなく、エネルギー・情報コースや物質・情報卓越教育院など多彩な教育プログラムが用意されています。研究面では、化学本来の実験・理論両面にわたる新しい手法を積極的に創出するとともに、物理学、生物学など物質の関わるさまざまな領域との融合をはかり、新分野を次々に開拓しています。これらの成果は国内外に発信され、我が国の社会、産業ひいては文化の発展に貢献するとともに、国際学术交流を通じて世界の化学の発展に大きく貢献しています。

このように化学系では、力量のある基礎的研究と論理的思考の積み上げに基づき、新物質や新分子を開拓し、その働きによって我々が直面している種々の問題の新しい解決法を切り開こうとしています。これを実現するために、化学の基本原理やさまざまな現象の解明を目指す研究室、またそのような知識に基づいて新しい機能を持った物質を創り出す研究室など、多彩な分野の学生と研究者が切磋琢磨しつつ協力して活動しています。化学系の教員は学生の皆さんが飛躍するのを全力で支援します。世界は皆さんの才能を待っています！

2026年度化学系主任
大森 建

化学系教員一覧

石内 俊一 教授	植草 秀裕 教授
大島 康裕 教授	川口 博之 教授
谷口 耕治 教授	河野 正規 教授
沖本 洋一 准教授	近藤 美欧 教授
北島 昌史 准教授	火原 彰秀 教授
西野 智昭 准教授	前田 和彦 教授
石川 忠彦 助教	八島 正知 教授
黄 柏融 助教	大塚 拓洋 講師
中村 雅明 助教	原田 誠 講師
平田 圭祐 助教	石田 豊 助教
藤井慎太郎 特任准教授	岡崎めぐみ 助教
大森 建 教授	小杉 健斗 助教
後藤 敬 教授	齊藤 馨 助教
豊田 真司 教授	関根あき子 助教
南 篤志 教授	和田 雄貴 助教
山下 誠 教授	松本 隆也 特任教授
安藤 吉勇 准教授	Pavel Usov 特任准教授
小野 公輔 准教授	蘇 勝群 特任助教
森本 祐麻 准教授	野上 健治 教授
有川 忍 助教	寺田 暁彦 准教授
鎌野 哲 助教	ユーハス ゲルゲリ 准教授
佐藤 秀亮 助教	
志村 純 助教	
山科 雅裕 助教	

CONTENTS

化学系の教員一覧	1
指導教員および研究内容	2-3
研究室紹介	
石内研究室	4
大島研究室	5
谷口研究室	6
北島研究室	7
沖本研究室	8
西野研究室	9
大森・安藤研究室	10
後藤・小野研究室	11
豊田研究室	12
南研究室	13
山下・森本研究室	14
植草研究室	15
川口研究室	16
河野研究室	17
近藤研究室	18
火原研究室	19
前田研究室	20
八島研究室	21
野上・寺田研究室	22
ユーハス研究室	23
入試情報	24
カリキュラム	25-26
代表的な修士論文・博士論文題目一覧	27-28
学生の受賞	29
教員の受賞	30
修了後の主な進路	31
学生からひとこと	32
卒業生の声、同窓会組織“東工大理化学会”	33-34
化学系教員マップ	35



指導教員および研究内容

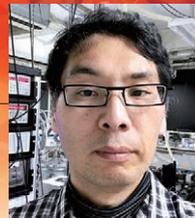
指導教員 電子メール		研究内容
教員室	内線	
教授 石内 俊一		冷却イオン分光で探る分子認識のからくり 極低温分子及びイオンのレーザー分光、生体分子や人工超分子系における分子認識メカニズムの研究、複雑分子系のための新しい分子論的研究法の開拓
ishiuichi.s.94d6@m.isct.ac.jp		
本B19	7601	
教授 大島 康裕		ダイナミックな分子の姿をありありと捉え、自在に制御する 光/原子/分子科学、強レーザー場科学、分子分光学、反応動力学、分子運動、量子波束、コヒーレント制御、分子間相互作用
ohshima@chem.sci.isct.ac.jp		
西4-105B	2899	
教授 谷口 耕治		固体中で光・電荷・スピンの織りなす協奏現象の探索 ～物質の隠された魅力の発掘～ 固体物性化学。有機・無機ハイブリッド化合物や無機化合物を舞台とした機能性物質の探索、キラル電子物性、マグネトイオニクス（イオン輸送を介した磁性制御）、マルチフェロイクス
taniguchi.k.1b71@m.isct.ac.jp		
東1-25	3532	
准教授 沖本 洋一		エキゾチック強誘電体を光で見る、操る 非線形光学分光技術を用いた有機・無機強誘電体材料の観察・制御手法の開発と新機能開拓
okimoto@chem.sci.isct.ac.jp		
本117	3895	
准教授 北島 昌史		化学の根本原理を解明する 原子・分子衝突、反応物理化学、反応素過程、放射光を利用した超低速電子によるCold Collision実験、配向分子による電子散乱
mkitajim@chem.sci.isct.ac.jp		
西4-503東	3812	
准教授 西野 智昭		分子協奏が創る単分子の化学 単分子化学、ナノバイオ、分子認識、分子エレクトロニクス、表面科学、分子探針、走査プローブ顕微鏡、有機薄膜、電気化学
nishino.t.09b3@m.isct.ac.jp		
西4-107	2242	
教授 大森 建		末踏の合成標的への挑戦：複雑な構造を有する天然有機化合物の自在合成 有機合成化学、生理活性天然物の全合成研究、新規立体制御法の開発、巨大分子の精密合成、ポリフェノール
kohmori@chem.sci.isct.ac.jp		
東1-35	2761	
教授 後藤 敬		ナノサイズ有機分子の化学：機能を最大限に引き出すデザイン戦略 機能性ナノサイズ分子の開発、生体反応活性中間体の合成モデル研究、機能性ロタキサンの設計・合成、有機元素化学、超分子化学、生体機能関連化学
goto.k.5640@m.isct.ac.jp		
本B18	3543	
教授 豊田 真司		芳香環の配列を自在に設計して新しい構造や機能を創る 特異な構造・性質をもつ新パイ共役系化合物の設計と合成。大環状、らせん形化合物の構造と機能。芳香族分子を用いた超分子集合体の構築。
stoyota@chem.sci.isct.ac.jp		
東1-54	2294	
教授 南 篤志		化学の力で生物を超える：末踏分子合成のための独自戦略 天然物化学、生物有機化学、生体機能関連化学、生物活性天然物のバイオ合成、デザイナー酵素の設計と機能解明
minami.a.1ce1@m.isct.ac.jp		
東1-55	2631	
教授 山下 誠		全ての元素を対象に新結合・新構造・新反応を開拓 新規典型元素化合物の合成と物性解明・材料化学、次世代型石油化学プロセスを志向した均一系触媒の開発、量子技術に資する分子化学の探索
yamashita.m.6dbb@m.isct.ac.jp		
東1-44	2308	
准教授 安藤 吉勇		有機化合物の精密化学合成：天然物およびデザイン分子を標的としたものづくり 有機合成化学、天然物合成、立体化学の精密制御、光化学反応、新規反応開発、新規機能性分子の設計と合成
yando@chem.sci.isct.ac.jp		
東1-34	3531	

<p>准教授 小野 公輔</p> <p>ono@chem.sci.isct.ac.jp</p> <p>本B02C 3279</p>	<p>テーラーメイドナノ空間の創出</p> <p>超分子化学、有機化学、ホスト・ゲスト化学、高分子化学</p>
<p>准教授 森本 祐麻</p> <p>yuma.morimoto@chem.sci.isct.ac.jp</p> <p>東1-45 2766</p>	<p>反応中間体の捕捉を軸とした反応機構解析</p> <p>遷移金属錯体に関与する反応系中に生じる活性種の直接観測・単離を切り口に、反応機構の詳細解明に挑みます。さらにここで得られた情報を元に、種々の難反応性基質を転換する触媒系構築を目指します。</p>
<p>教授 植草 秀裕</p> <p>uekusa@chem.sci.isct.ac.jp</p> <p>本B02B 3529</p>	<p>有機結晶を使った新しい結晶性材料の解析と展開</p> <p>機能性の有機物結晶を設計し、結晶構造解析からその機能を調べる。医薬品原薬結晶の物理化学的性質と構造、包接化合物結晶の設計と機能、フォトクロミズム物質の探索、合成と物性制御など。単結晶・粉末結晶X線構造解析による分子構造・結晶構造の動的解析と分子間相互作用の解析。</p>
<p>教授 川口 博之</p> <p>kawaguchi.h.7eca@m.isct.ac.jp</p> <p>東1-24 2234</p>	<p>遷移金属錯体の化学</p> <p>無機合成化学、錯体化学、有機金属化学、小分子活性化、金属クラスター、カルコゲニド錯体</p>
<p>教授 河野 正規</p> <p>mkawano@chem.sci.isct.ac.jp</p> <p>北3-605 2158</p>	<p>～非平衡下でのものづくりー空間とポテンシャルの制御～「結晶性超分子化学」</p> <p>錯体化学、超分子化学、結晶相反応、その場観察X線構造解析</p>
<p>教授 近藤 美欧</p> <p>kondou.m.4159@m.isct.ac.jp</p> <p>北3-604 3659</p>	<p>金属錯体×精密配列 = 未踏触媒！</p> <p>錯体化学、触媒化学、小分子活性化、超分子化学、人工光合成、フレームワーク触媒、Metal-Organic-Framework, Metal-Organic-Cage</p>
<p>教授 火原 彰秀</p> <p>hibara.a.31f8@m.isct.ac.jp</p> <p>西4-609 3904</p>	<p>ナノ・マイクロスケールの界面化学と物理化学に基づく分析化学研究</p> <p>分析化学、蛍光偏光イムノアッセイ法、レーザー分光法、分析装置開発、大気化学、エアロゾル表面化学、フッ素化合物の分子間相互作用解析と分離・センサーへの応用</p>
<p>教授 前田 和彦</p> <p>maeda@chem.sci.isct.ac.jp</p> <p>北3-702 2239</p>	<p>半導体光触媒を中核とした人工光合成系の構築</p> <p>光エネルギー変換、水の分解、水素製造、二酸化炭素固定化、ナノ材料、金属錯体/半導体ハイブリッド材料、複合アニオン化合物、無機固体化学、光電気化学</p>
<p>教授 八島 正知</p> <p>yashima@chem.sci.isct.ac.jp</p> <p>西4-410 2225</p>	<p>結晶構造と電子を調べてエネルギー・環境材料、電子材料、バイオ材料、触媒をデザインする</p> <p>エネルギー・環境・電子・バイオ・構造材料の結晶構造、イオンと電子を調べて、新材料を原子・電子レベルでデザインしよう！高温での精密結晶構造解析、構造物性、中性子・放射光X線回折と散乱、無機系新素材、燃料電池、光触媒、誘電体、環境浄化触媒、リチウムイオン電池、第一原理バンド計算、化学結合、ナノ粒子、相転移、電子・核密度解析、イオン伝導、熱分析、状態図</p>
<p>教授 野上 健治</p> <p>knogami@ksvo.titech.ac.jp</p> <p>草津白根火山観測所 0279-88-7715</p>	<p>マグマに含まれる揮発性成分の挙動の解明</p> <p>火山化学、火山噴火予知、火山噴出物、揮発性成分、火山ガス、火山岩の変質過程、海底火山、温泉、温泉沈殿物、粘土鉱物</p>
<p>准教授 寺田 暁彦</p> <p>terada.a.77b1@m.isct.ac.jp</p> <p>南5-405A 2639</p>	<p>本物の火山が実験場 ～火山現象の熱学的研究～</p> <p>火山における熱的現象、火山ガス、噴煙、噴気地、火口湖、火山浅部熱水系、火山活動のモニタリング</p>
<p>准教授 ユーハス ゲルゲリ</p> <p>juhasz@chem.sci.isct.ac.jp</p> <p>西4-510 2357</p>	<p>Material design by computational chemistry for a cleaner future</p> <p>Catalysis, electrocatalysis, nanoparticles, carbon nanomaterials, quantum chemistry</p>

石内研究室

URL <http://www.chemistry.titech.ac.jp/~ishiuchi/index.html>

E-mail ishiuchi.s.94d6@m.isct.ac.jp



石内 俊一 教授

冷却イオン分光で探る分子認識のからくり 「物理化学」

1. はじめに

分子の機能は分子と分子が協調しあうことで生まれます。生命はその最も複雑で精緻な例です。細胞内の様な多種多様な分子が混在している系で狙った化学反応を起こさせるには、分子が互いを認識する能力ー分子認識が不可欠です。分子認識には、例えばDNA塩基対の様に形の相補性によるものもありますが、構造がかっちり決まっていな柔軟な分子どうしても精密に分子認識できる例がたくさんあります。その様な系ではどうやって精密な分子認識が達成されているのでしょうか？本研究室では、冷却イオン分光という新しい方法で、複雑な分子認識のしくみの解明に挑んでいます。

2. 研究テーマ

(1) ボトムアップによる複雑分子系の新規研究法の開拓

複雑分子のしくみを調べるために、私たちは、機能の中心となる部分だけを切り出してそのしくみを調べ、その本質を理解しようというやり方ーボトムアップアプローチをとっています。柔軟な分子系、つまり、室温では様々な配座異性体（通常は異性体として区別できない）の間を揺らいでいる系の構造を精密に調べるために、溶媒和状態を精密に制御できる真空中に導入して、極低温に冷却することで揺らぎを止め、種々の精緻なレーザー分光法を用いて構造情報を得ます（冷却イオン分光）。私たちの装置は、独自の技術によりイオンの冷却性能や感度が世界最高レベルで、これまで難しかった測定が簡単にできるようになりました。私たちは、日々、人類未達の研究をエキサイティングにそして楽しみながら進めています。



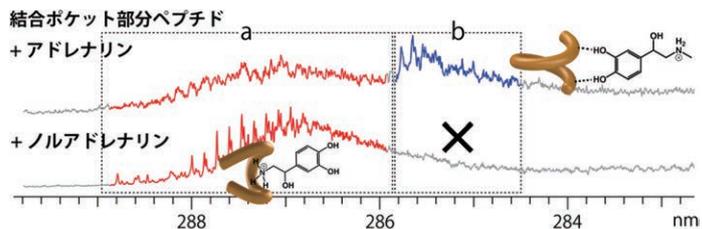
エレクトロスプレーで溶液中の分子イオンを気相中に取り出す。クラスタ生成トラップで溶媒和クラスタを生成し、特定の個数の溶媒分子が付着したクラスタを四重極質量分析器で選択し、極低温冷却イオントラップで瞬間凍結する。ここに、波長可変レーザーを導入し、レーザー光吸収により生成した壊れたイオン（フラグメントイオン）を飛行時間型質量分析器で検出する。フラグメントイオン量をモニターしながらレーザー光を波長掃引することでスペクトルが測定できる。

(2) レセプター・リガンド系の分子認識

例えば、神経伝達過程では、シナプスにおいて神経伝達物質が放出され、それが別の神経細胞の表面にあるレセプタータンパク質に結合することで、神経シグナルが伝達されます。この過程は「鍵と鍵穴」に例えられ、それぞれのレセプターに結合する神経伝達物質が決まっ

ています。代表的な神経伝達物質であるカテコールアミンは、複数の単結合を持つため、様々なコンフォメーションをとる柔軟な分子ですが、どうしてこの様な分子が精密な鍵としてはたらくのでしょうか？

私たちは、 β 2-アドレナリンレセプターの結合ポケットの一部を構成するペプチドと種々のカテコールアミンの複合体に対し冷却イオン分光を適用しました。その結果、レセプタータンパク質に認識されるリガンドとそうでないリガンドでは紫外スペクトルが大きく異なり、前者ではX線結晶構造解析でわかっている分子認識構造をとるのに対して、後者ではその様な構造をとらないことがわかりました。つまり、結合ポケットの一部でも分子認識が可能だということです。興味深いのは、カテコールアミンの構造が異なる部分がペプチドとの結合に直接関与していないということで、それにも関わらずそれらの構造の違いを認識できるのはとても不思議です。



β 2-アドレナリンレセプターの結合ポケット部分ペプチド (SIVSF) とアドレナリンおよびノルアドレナリンとの複合体の紫外スペクトル。ノルアドレナリンは β 2-アドレナリンレセプターには結合しにくく、ノルアドレナリン複合体ではアドレナリン複合体で観測されるb-バンドが観測されない。このバンドは赤外分光により分子認識構造（上図）であることがわかった。

(3) 金属イオン認識のメカニズム

生体内には、特定のイオンのみを選択的に通すイオンチャネルや、細胞内から特定の金属イオンを細胞外に運び出すイオンフォアという分子があります。また、それらにヒントを得て人工のイオン認識分子も合成されています。金属イオンは球体なので、形で認識するのは困難です。では大きさを認識しているのでしょうか？例えば、カリウムイオンチャネルはカリウムより小さいナトリウムやリチウムイオンも通しません。つまり、単純に穴の大きさを分けている訳ではありません。金属イオンの選択には周りの水分子が重要であることはわかっていますが、分子レベルでどの様にイオン認識と関わっているのかわかっていません。私たちは、水和を分子レベルで制御し、個々の水分子がイオン選択性にどの様に関わっているかを、冷却イオン分光を用いて研究しています。

3. 学生の皆さんへ

フレキシブルで複雑な分子系が織りなす機能のしくみを解き明かすには、分子レベルの精密な情報が不可欠です。複雑系を分子レベルで研究するという分野は実験的にも理論的にも未開拓であり、今までにない新しい技術とアイデアが必要です。きっと皆さんの奇想天外なアイデアが大いに役立つでしょう。私たちと一緒に、未開拓の分野を切り開きましょう！

大島研究室

URL <http://www.ohshima-yamazaki.chem.sci.isct.ac.jp/index.html>

E-mail ohshima@chem.sci.isct.ac.jp



大島 康裕 教授

超高速で動き回る分子の姿をありありと捉える 「物理化学」

1. はじめに

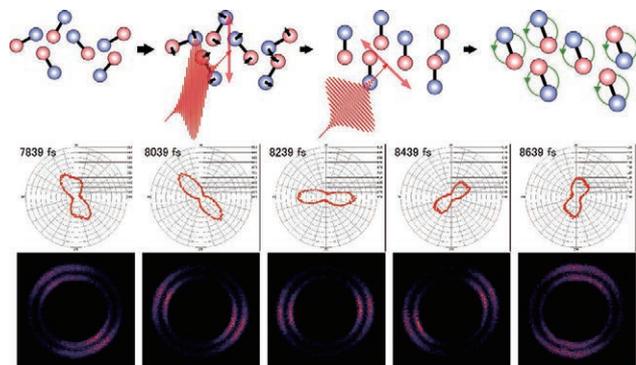
紙の上にも書いた分子式は分子の骨組みだけを教えてくれますが、実際の分子は空間を飛行し、回転し、振動しています。室温の条件であっても、典型的な分子で1秒間に300メートル飛び回り、1000億回も回転し、振動は1兆～10兆回に達します。私たちは、極めて高い時間分解能やエネルギー分解能を有する各種レーザーを駆使し、さらに、荷電粒子画像観測法のような先端計測技術を組み合わせることにより、激しく運動する分子の姿を「ありありと捉える」こと、その上で、分子の運動を「自在に操作する」ことを目指して、以下のテーマで研究を進めています。

2. 研究テーマ

(1) 分子運動量子状態の詳細決定と制御法の開拓

分子運動をコントロールするために、まず、分子を1ケルビン以下の極低温状態に冷却して運動をストップさせたのち、1ピコ秒(1兆分の1秒)よりも短い強力な光パルスを用いて瞬間的に分子に撃力を加え、運動を励起します。このような「撃力」光による状態分布の変化を精密に測定する方法を、私たちは独自に開発しました。さらに、レーザーパルスを適切な時間間隔で2発続けて照射することにより、そろって右回りもしくは左回りに回転させることも実現しています。パルス間隔は分子の回転周期(10ピコ秒)程度で、この時間内で回転方向の整列が完了します。そのために、回転のタイミングをきれいにそろえることができます。

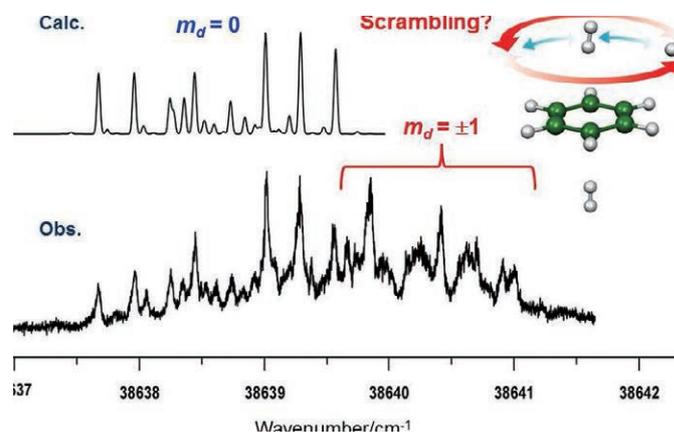
そろって回転する分子の集団を作り出すことに成功したことは、超高速で運動する分子の姿を「ありありと捉える」ことへとつながる重要なステップです。実際についに先ごろ、独自に開発したイメージング法を活用して、回転する分子の「動画」を撮影することに成功し、「粒子であるとともに波としての性質を持つ」というミクروسケールの物理法則に支配された分子の世界を、明確に視覚化することができました。



そろって右回りに回転する分子集団生成の模式図(上段)、観測した画像イメージ(下段)、ならびに、対応する分子の空間配向を極座標プロットしたもの(中段)。各イメージは、左から右へ0.2ピコ秒ごとのスナップショットに対応。

ての性質に深く関わる分子間相互作用を定量的な信頼性をもって特定することが挙げられます。そのためには、少数個の分子が弱く結びついた集合体(分子クラスター)を気相孤立状態に取り出して、振動量子準位を精密に測定することが最も有力です。

当研究室では、極低温状態で分子クラスターを効率よく生成し、その紫外可視スペクトルを測定することによって、クラスター内で構成分子の相対配向や位置が大きく変化する運動を実験的に特定することに取り組んでいます。例えば、ベンゼンに3つの水素分子が結合したクラスターでは、2つの水素分子が入れ替わる大規模な構造変形運動が存在することを明らかにしました。



ベンゼン-(水素)₃クラスターのスペクトルと内部運動

(3) 電子や原子の粒子性を利用した新規分光法の開拓

多くの化学反応は、分子内の電子分布の変化を契機として結合の生成・開裂が起こり、それを駆動力として各構成原子がその運動状態を変えることで進行すると考えられます。私たちは、これら電子や原子の状態変化を、粒子性の特徴である運動量の変化として直接捉える、まったく新しい計測法を独自に開発し、分子間相互作用や化学反応の核心に迫ることを目指しています。

3. 学生の皆さんへ

分子運動コントロールの今後のターゲットは「反応」です。分子構造の変化、さらには異性化のような化学反応を効率的かつ選択的に誘起するような、エキゾチックな運動状態を作り出したいと思っています。また、化学反応が進行している「現場」である遷移状態近傍に直接アクセスし可視化することにも挑戦し、真に量子論的な枠組みのなかで「望ましい反応のみを進行させる」ための指導原理の確立を目指したいと考えています。

このような「夢」の実現には、オリジナルなアイデアとオリジナルな装置の開発が欠かせません。当研究室では、これまでも複数の「世界でただ1つの装置(レーザーも含む)」を作り出して、独自の研究を進めてきました。「今まで誰も見たことのないこと」に(ちょっと大げさですが)人類史上初めて出会う際の高揚感を味わってみませんか? 独立の気概と柔軟な発想を持って「知の地平の拡張」に参加する同志諸君を待っています!

(2) 精密分光による分子間相互作用の解明

分子運動コントロールの重要な応用の1つとして、物質のほぼ全

谷口研究室

URL <http://www.oihp.chem.sci.isct.ac.jp>

E-mail taniguchi.k.1b71@m.isct.ac.jp



谷口 耕治 教授

固体中で光・電荷・スピンの織りなす協奏現象の探索 ～物質の隠された魅力の発掘～

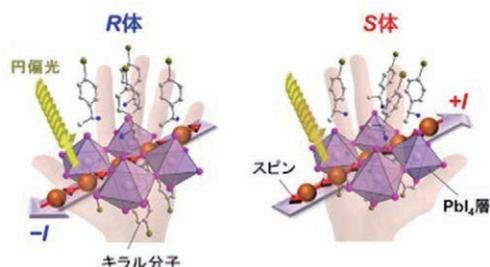
1. はじめに

よく知られているように、物質は多数の原子から出来ています。その原子はさらに、原子核と電子とから構成されていますが、実はほとんどの場合、物質中で主役を演じているのは電子の方です。たとえば、物質の化学反応や化学結合では、価電子が大きな役割を果たすことが知られていますし、物質が電気を流す、光る、磁石になるといった、我々の生活に欠かせない様々な機能的な性質（機能物性）も、実は電子が引き起こしているものです。私たちは、電子の性質に着目することで、光物性、電気伝導性/誘電性、磁性などの機能物性を単独で誘起するのではなく、互いに結合させ、新奇な光・電荷・スピンの協奏現象として誘起することに興味を持っています。実際の研究では、このような物性が発現する場として固体物質を選択し、物質合成から物性評価までを自分たちで行うという、自給自足型のスタイルで研究に取り組んでいます。また、研究の鍵となる電子が量子論的な粒子であることから、化学だけでなく、物理など他分野の知識や技術も、使えるものは総動員してアプローチするというスタンスで物質に向き合っています。最近、光・電荷・スピンを結びつける要素として、物質の右手・左手の性質（キラリティ）に興味を持っており、物質開発を行いながら、キラル電子物性の開拓を進めています。将来的にはこのようなキラル電子物性の研究をもとに、自然科学最大の謎の一つとも言われているホモキラリティの謎（生命体が片方のキラリティの分子のみで構成されていること）の起源に迫っていければと考えています。

2. 研究テーマ

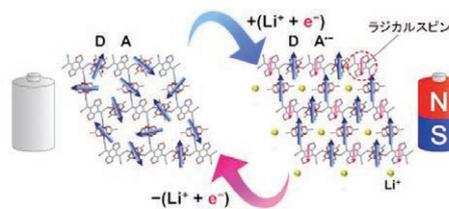
(1) キラル電子物性の開拓

キラルな結晶構造を持ち重元素から構成される物質は、非磁性であっても電子スピンによる磁氣的性質が発現するという、興味深い性質が予想されています。しかし、重元素から成る物質の大半が属する無機物では、自由にキラリティを選択して物質を合成することは非常に難しく、新しい物質の開発が期待されていました。これに対し私たちは、二次元有機・無機ハイブリッドペロブスカイトと呼ばれる系において、キラリティの制御が可能な重元素から成る新しい半導体の開発に成功しました。開発した半導体では、光を照射した際に、結晶の右・左のキラリティに応じて光電流の流れる向きが反転するといった変わった現象が、これまでに見出されています。さらにこの光電流中では、磁場を印加していないにも関わらず電子スピンの向きが揃うといった興味深い性質も予想されており、今後、光照射で磁化反転を制御出来るメモリデバイスのような、光を利用したスピントロニクスへの応用なども期待されています。



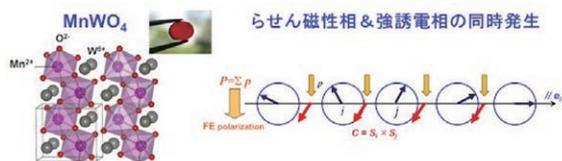
(2) イオン輸送を介した電気・磁気相関現象の開拓

電氣的な磁性制御は、エレクトロニクス技術との親和性から、応用物性分野において広く関心が持たれてきた主題の一つです。本研究では、現在の代表的な蓄電デバイスとして知られるリチウムイオン電池 (LIB) のメカニズムを、バルク物質に対する高密度の電子ドーピング制御法として利用するという独自の発想で、新しい電氣的磁性制御の実現を目指しました。これまでに、分子性化合物の有機金属構造体において、酸化・還元に伴うラジカルスピンの生成・消滅を利用して、LIBの充放電操作と連動させた可逆的な磁石状態のON-OFF制御に成功しています。このような酸化・還元反応に伴うイオン輸送を介した磁性制御は最近、“Magneto-ionic control”とも呼ばれ注目されており、今後、新たなスピン-イオン協奏現象デバイス（マグネトイオニクスデバイス）の創出につながることも期待されています。



(3) 新規マルチフェロイクスの探索&巨大電気磁気効果の開拓

一般に電気と磁気の相関というと、電磁気学の法則が良く知られていますが、物質中では、この法則で出てくる電束密度や磁束密度の時間変化を必要としない、固体特有の特異な磁性と誘電性の相関現象（電気磁気効果）が生じる場合があります。私たちは電気磁気効果を発現させる舞台として、一つの物質内でスピン秩序と強誘電秩序が共存する“マルチフェロイクス”と呼ばれる系に着目し、らせん型の特異なスピン配列が強誘電性を誘起する新しいタイプの酸化物マルチフェロイクスを発見しました。このマルチフェロイクスでは、スピン秩序と強誘電秩序の強い結合を利用して、磁場による電気分極フロップ (90°回転) や電気分極反転 (180°回転) のような、様々な新奇な巨大電気磁気効果の誘起に成功しています。



3. 学生の皆さんへ

電子物性の研究をしていて面白いのは、昔からよく知られていたような物質であっても、視点を少し変えるだけで、思いがけず魅力的な性質が見つかることがしばしばあるという点です。それまでただの石ころだと思っていたものが、急に最先端の機能性物質として光輝いて見えるようになる瞬間に立ち会えるのは、物性研究の一つの醍醐味です。当研究室では、多角的な視点で物質を眺めることを通して、このような物質の隠された魅力の発掘を目指しています。皆さんと、物質の深淵な世界に挑める日を楽しみにしています。

北島研究室

URL <http://www.kitajima.chem.sci.isct.ac.jp/index.html>

E-mail mkitajim@chem.sci.isct.ac.jp



北島 昌史 准教授

化学の根本原理を解明する

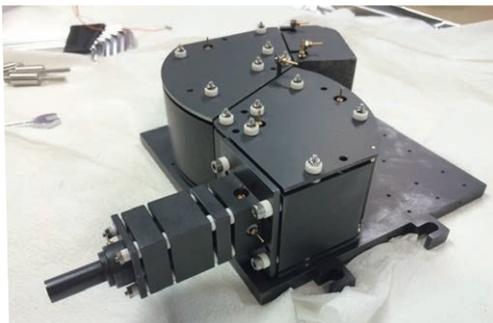
1. はじめに

原子・分子は物質の基本的構成要素であり、その性質や振る舞いが、様々な物質の個性、多様性を支配しています。原子や分子は他の原子・分子と衝突すると、化学結合の組み替えを起こして新しい分子を生成したりします。化学反応です。現象論としての化学反応は古くから研究されており、多くの知識と経験則が体系となって積み上げられてきました。しかし、化学反応が何故起こり、どのように進むのか、という問を根本原理から解明することは、今なお現代科学の重要な課題です。化学反応は、分子と分子の衝突により化学結合の組み替えが起こり、新しい分子が生成される過程ですので、化学反応の理解には「原子・分子衝突」の詳細な理解が不可欠です。原子・分子衝突は、物理学における散乱問題の典型例であり、大変重要であるとともに、極めて興味深い課題です。私たちのグループは、化学の根本原理を解明することを目指して、原子・分子の織り成す量子力学の世界を、世界で唯一の高性能装置を自ら開発して研究しています。

2. 研究テーマ

(1) 電子-分子衝突過程における立体ダイナミクスの研究

化学反応の立体効果突き詰めて、分子そのものが持つ反応性の立体効果を追及するテーマです。このテーマでは、電子ビームを、分子軸の向きの分かっている分子一つ一つに照射して、分子軸の向きと分子の反応の関係を精密に研究します。トロイダル型アナライザーと呼ばれる独特の電子エネルギー分析器と独自開発した高性能の電子モノクロメーターを組み合わせた



独自開発した高性能電子モノクロメーター



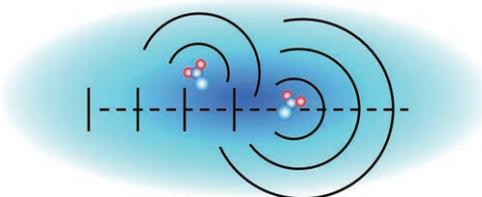
研究室での実験の様子

た世界で唯一の実験装置を開発し、研究を進めています。この装置には、学生さんの種々の独創的なアイデアが盛り込まれています。

(2) 超低エネルギー電子ビームによる Cold Electron Collision の研究

このテーマは、非常にエネルギーの低い電子ビームを原子・分子に照射して、量子力学の支配する世界の衝突を覗いてみようという

ものです。室温程度のエネルギーを下回るエネルギーの電子ビームは、電子のド・ブローイ波長が原子・分子のサイズよりも遥かに大きくな



Cold Electron Collision の概念図

り、純粋に量子力学の支配する世界が現れると期待されます。私たちは、このような衝突過程を "Cold Electron Collision" と呼び、分子衝突に現れる新たな量子ダイナミクスを探索しています。

私たちは、放射光を用いることで、世界で最も低いエネルギーの電子衝突実験が行える装置を開発し、冷たい電子衝突の世界を探索しています。



放射光実験施設での実験の様子

(3) 真空紫外光による分子光イオン化ダイナミクスの研究

分子が真空紫外光や軟X線を吸収すると、分子のイオン化が起きたり大きな内部エネルギーを持った励起状態が生成したりします。分子のイオン化で生成する電子のエネルギーが非常に小さい場合、電子が分子イオンから離れるまでに受ける相互作用は無視できなくなり、分子イオンの振動・回転運動に影響されて、様々な現象が観測されることが期待されます。私たちは、放射光を用いた高分解能の光電子分光やしきい光電子分光により分子のイオン化ポテンシャル近傍での光イオン化断面積の測定を通して、今まで見落とされていた分子の光イオン化ダイナミクスの研究をしています。最近行った、水素分子とその同位体についての研究では、現在の一般的な理論では説明できない特異的な現象を見出しています。

3. 学生の皆さんへ

我々の特徴は、世界で唯一の高性能装置を自らの手により開発することです。研究がうまく行くこともあれば、うまく行かないこともあります。でもその困難さを乗り越えることによって、実社会で必要とされる、課題設定能力や問題解決能力が身につきます。物理化学の革新的な研究に興味のある人、是非一緒に研究をして、ともに成長しましょう。

沖本研究室

URL <http://www.pipt.sci.titech.ac.jp>

E-mail okimoto@chem.sci.isct.ac.jp



沖本 洋一 准教授

固体材料の極性を光で見る・操る

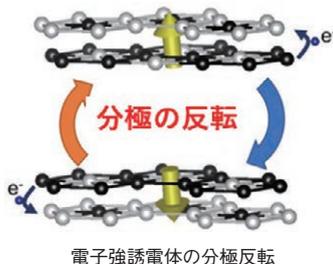
1. はじめに

この世の中の結晶には、結晶自身の右と左（または上と下）の区別ができるものがあります。このような「極性（電気双極子モーメント）」を持つ構造をもった結晶を皆さんは思いつくことができるでしょうか？もちろん数少ない原子からなる「分子」なら左右の違いがある例をたくさん挙げるができると思います。しかし、分子や原子がアボガドロ数個集まってできる「結晶」の世界では、極性構造を持つものは実はあまり多くありません。もしそのような極性構造を持つ結晶が見つかり、かつその方向性を人間の手（外部電界）で変えることができる時、その結晶には「強誘電体」という特別の名前で呼ばれています。強誘電体は、それが持つ方向性（分極）という性質を活かして、メモリやキャパシタ、圧電素子などといった現代産業に不可欠な機能を提供しています。それゆえに、新しい強誘電体の機能開発は現代の重要なテーマとなっています。私の研究室では、近年開発が進んでいる新型の強誘電体材料に注目し、その分極特性を「第二次高調波測定」という非線形光学効果（SHG）を使って調べます。さらに、レーザー光による光励起とSHGを組み合わせた分極状態の変化（ダイナミクス）の実時間追跡にも挑戦し、強誘電材料の高速分極制御と実空間観察にチャレンジし、次世代産業に資する新しい強誘電機能を探索する研究を行っています。

2. 研究テーマ

(1) 電子強誘電体材料

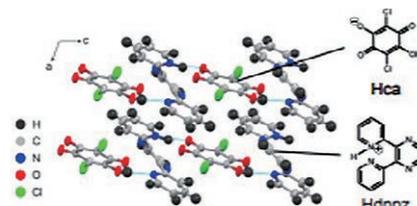
強誘電体の中には、原子やイオンではなく電子の移動で分極が発生、反転するものがあります。これは「電子強誘電体」と呼ばれている新型の材料で、今世紀に入ってから提唱されました。注目しているのは、 Fe^{3+} と Fe^{2+} の二種類の鉄イオンを含む酸化物の $LuFe_2O_4$ 結晶です。我々は、その分極が結晶内に存在し、その起源が Fe^{3+} と Fe^{2+} の不均化に起因していることを、第二次高調波測定からつきとめ、この材料は、原子やイオンではなく鉄イオン中の「電子」の配列で分極と反転を生じることを明らかにしました。これは、自身の極性の反転に必要なエネルギーやそれに要する時間を、従来型に比べ圧倒的に低減できる可能性を秘めており、次世代産業に 응용が期待できる強誘電体材料として注目されています。また最近では、この電子強誘電体のもつ分極に由来する光起電力効果や電気磁気効果を、第二次高調波測定から調べる研究にチャレンジしています。



(2) プロトン移動型有機強誘電体

近年、水素結合を介して分子性結晶を組む有機共結晶群において、高い強誘電性を示すものが次々に見つかっています。我々は、その中から室温で強誘電性を示すHdppz-Hca（ジ・ピリジニルピラジノクロラル酸）共結晶に注目し、超高速レーザーパルス光源を用いてそ

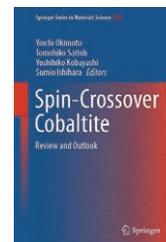
の強誘電性をコントロールすることに挑戦しています。この結晶に、電場振動位相が固定された中赤外フェムト秒パルス（最大強度が $\sim 30\text{MHz/cm}$ ）を印加し



たところ、振動パルスが印加された時間の間だけ系の示すSHG強度が20%程度増強するという現象を発見しました。これは、振動電場の印加時間の間だけ（非線形ポテンシャル中にある）プロトンが平衡位置を変化させ、その結果系の強誘電性が増大したために起きたと考えられ、フェムト秒スケールでの超高速強誘電性スイッチの新しい手法を示したものととして注目されています。

(3) スピנקロスオーバー極性化合物

三価のコバルトイオンを含む化合物の中には、磁性と結晶構造が結合して起きる「スピנקロスオーバー（SC）転移と呼ばれる現象を示すものがあります。 $BiCoO_3$ はそのような材料の一つですが、この試料はSC転移にともなって極性構造への変化を示すことが特長です。我々は、この系に高強度テラヘルツ光パルス（遠赤外線パルス）を照射することにより、この $BiCoO_3$ の示すSHG強度が50%程度増強することを見出しました。これは、強誘電材料の示す非線形光学特性をアップする新手法として新聞、サイトなどにも取り上げられました。



3. 学生の皆さんへ

本研究室に所属する学生は、まずスタッフと研究テーマについて相談した上で研究計画を選択、立案し、スタッフや研究室の先輩の指導の下、実験を進めていきます。得られた結果は研究室の皆で議論してストーリーを完成させ、学会発表や論文発表を行います。それに加えて、週に一度学生が行うセミナー（最新の論文紹介や自分の実験の進捗報告）と読書会（固体化学、非線形光学などの教科書の輪読）を行い、研究のための基礎となる力を養います。

これまでの大学の勉強は「受け身」で行うことが多かったと思いますが、研究室での活動は皆さんが主人公であり、自身の手で主体的に行っていくことが求められます。そのためには、研究生活と私生活にメリハリをつけて生活する（しっかり遊んでしっかり実験することが必要であると思います）。

本研究室では、レーザー光を用いた実験を行います。レーザーに関する知識は不要です。（研究室に入ってから丁寧に指導します。）皆さんに期待する能力は、これまで中学、高校、大学の勉強で培ってきた量子化学、分析化学、そして基礎物理（力学・電磁気学）の知識です。これらの基礎学力をベースに、最先端の研究活動をスムーズに進めることができるように指導していきます。皆さんと一緒に光を用いた最先端物質科学の研究を行えることを楽しみにしています。



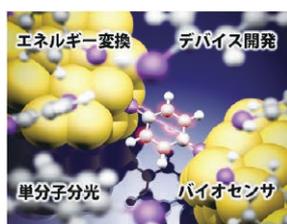
西野 智昭 准教授

単分子の化学 — ナノスケールの物質科学を究める —

1. はじめに

分子はバラエティに富んだ化学的性質と機能をもっています。この多様性に富む分子1個を金属電極間に挟むと、分子のもつ機能に加え、分子と金属の相互作用によりさらに多様な性質・機能を単分子はもつようになります。例えば、普通は絶縁体である分子が金属と同じように電気を流したり、金属表面でも進行しない触媒反応が電極間に架橋した単分子では進行したり、常磁性の分子が強磁性を示すことなどがこれまで明らかにされてきました。これら電極間に架橋した単分子の優れた機能を自由に利用することが出来れば、高効率のエネルギー変換素子、単分子で動作する超小型コンピュータなどを実現することが出来ます。また単分子を検出できることを最大限に生かすと、高感度のセンサ利用も可能です。そして、光合成、太陽電池で重要なプロセスである光電変換など複雑な現象を、単分子レベルで解明することも単分子計測技術を適用することで可能となります。

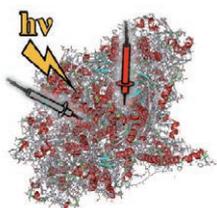
以上のような興味から、私達は、単分子を利用した、高効率エネルギー変換、低消費電力を実現する単分子素子、高感度バイオセンサ、そして、単分子を見る手法の開拓などの研究を展開しています。最終的には、単分子を利用した新たな化学分野を創発したいと考えています。



2. 研究テーマ

(1) エネルギー変換の単分子計測

太陽電池は再生可能エネルギー技術として重要なものです。私たちは、エネルギー変換効率の向上のために、単分子計測の技術を活かして、その基礎過程の解明に挑戦しています。光励起に伴う電荷分離が太陽電池の発電におけるもっとも重要な過程であり、これを単分子レベルで捉えるための計測法を開発しています。実際の太陽電池では構成要素や界面構造など多くの要因が相互に複雑に関連しているため電圧発生機構を分子レベルで理解することは困難です。

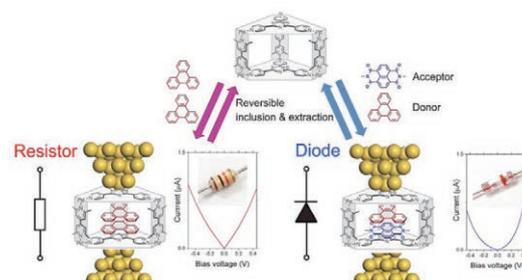


そこで、電荷分離などの素過程を最も単純な単分子レベルで計測することによって、発電に至る基礎過程を分子尺度で解明できます。さらに、光だけでなく、熱エネルギーを電力に変換する熱電変換についても単分子レベルで計測し、明らかにしています。

(2) 単分子を用いたデバイス開発

単分子に素子機能を賦与することができれば、究極サイズの微小低消費電力素子をつくりだすことができます。素子の微細化は高集積化につながり、コンピュータの性能を飛躍的に向上させることが出来ます。私たちは単分子素子の実現にむけ、単分子スイッチ、ダイオードの開発に成功してきました。特に単分子ダイオード開発で

は、かご分子にドナー性とアクセプター性の分子を積層させることで整流特性を発現させました。積層させる分子を変えることで機能を自由にデザインできます。また、分子を電流計測プローブとして用いることによっても整流特性を計測することに成功しています。



(3) 単分子を検出できるバイオセンサの開発

私たちは、分子認識化学を単分子接合に応用し、わずか1つの生体分子を選択的に直接はかる手法を開発しています。例えば、DNAの単分子検出法を開発しました。金属電極にあらかじめDNAを固定しておく、それに相補的なDNAが存在するときのみ単分子-単分子接合が形成され電子伝導が生じるため単分子検出が達成されます。その電子伝導度はDNAの組成に極めて敏感であるため、がんや老化の一因となるDNAの変異や損傷も検出することができます。

この技術を利用すればDNA単分子で遺伝子検査が実現できる可能性もあります。DNA以外にも様々な生体分子や生体シグナルの単分子検出法を開発しています。

(4) 単分子分光法の開発

通常の光学顕微鏡では、たった一個の分子を見ることはできません。そこで、私たちは単分子接合の振動分光計測、電子状態計測法などの新しい分光法を開拓を行っています。接合を流れる電子と分子振動の相互作用に由来する伝導度の微弱な変化に着目することによって、接合の分子の種類、さらにその数まで決定できます。これによって、ベンゼン分子を用いて世界で初めて有機単分子の振動分光計測に成功しました。このベンゼンの系で興味深いことは、バルクでは絶縁体であるベンゼンが単分子接合となると、金属と同程度に電気を流した点です。単分子接合に特徴的な物性の発現と言えます。

さらに、ピリジンを用いて単分子接合の動的な揺らぎを実時間で計測する事などにも成功しています。

3. 学生の皆さんへ

以上のように、私たちは単分子だけが発現する物性探索・機能開発と、単分子だからこそ分かる基礎過程の研究を行っています。興味のある性質や現象をあらわに見るために分子、その接合や計測法を自分でデザインできるのが醍醐味です。想像・創造力がかきたたられ、成功したときの興奮は筆舌には尽くせません。みなさんの研究室見学、そして研究室への参加を歓迎します。

大森・安藤研究室

URL <https://www.org-synth.chem.sci.titech.ac.jp>

E-mail 大森/kohmori@chem.sci.isct.ac.jp 安藤/yando@chem.sci.isct.ac.jp



大森 建 教授 安藤 吉勇 准教授

～未踏峰の合成標的に挑む～「合成有機化学」

全合成のススメ

私たちの究極の目標は、有機化合物を思いのままに、自在に合成できるようになることです。その目標に向かって、当研究室では天然有機化合物の全合成に挑戦しています。また、その合成に役立つ新しい反応や合成論理の開拓も行っています。合成目標とする化合物の中には、天然から僅かしか得られない希少なもの、有用かつ強力な生理活性を持つもの、あるいは珍しい構造をもつもの、ときには非常に不安定で取り扱いにくいものなどもあります。それらをどのような作戦で効率的かつ選択的に作り上げるか。そこが我々の腕の見せ所ともいえます。

現在、私たちは、1) ハイブリッド型天然物(生合成経路が異なる構造単位が複合構造を形成している化合物)、2) 高度に酸化された骨格を持つ化合物、3) 歪んだ構造や、多環構造をもつ化合物、などに興味を持ち研究を進めています。どれも一癖二癖ある化合物ばかりで、そう簡単に合成できるわけではありません。

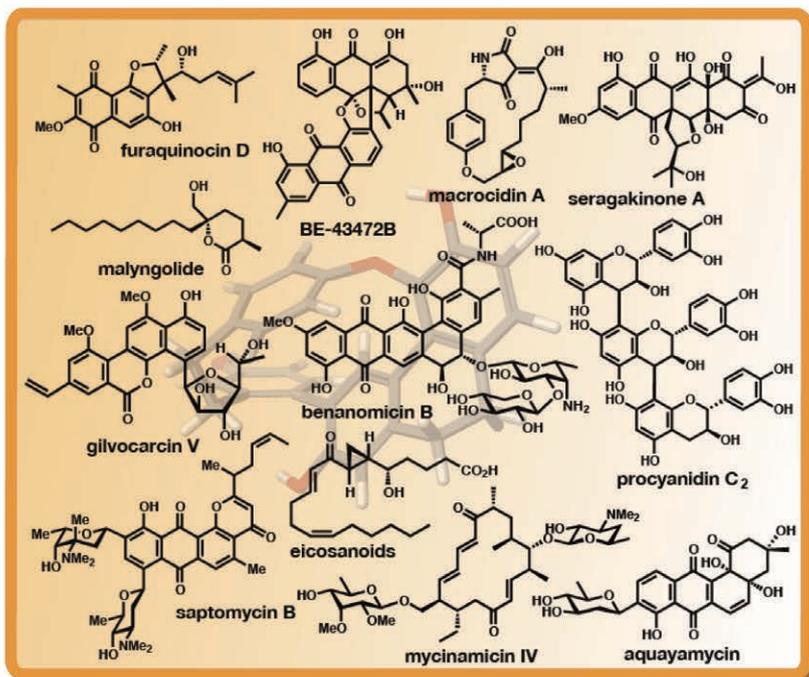
天然物合成はよく登山に喩えられますが、実際チャレンジしてみると、合成経路の開拓は、さながら地図を持たずに道なき道を突き進んでいくようなものです。遭難せずに難攻不落な要衝を越え、最終的に未踏の山の頂に到達するためにはどうすればよいでしょう？そこに私たちはあらん限りの知恵を絞ります。山の高さや急峻さに

よって登山の難易度が異なるように、合成においても標的化合物の構造次第で合成のアプローチが大きく変わります。成功のポイントは、個々の化合物において直面する特有の合成的課題を如何にして解決するか、ということです。私たちの研究室では、これまでにない独自の方法论を開拓し、それを駆使して全合成を達成するため、日々研究を続けています。下には、最近私たちが合成に成功した天然物の一例を挙げました。これらの合成は新しく開発した反応、合成論理を駆使して達成したものであり、そのほとんどが世界初です。

研究の主役は、いつも学生さん達であり、彼らが日々の実験の中で見つけたヒントが新たな発見を生み、またブレイクスルーにも繋がります。時には実験に失敗して、研究に行き詰まるもよしです。それも次なる発見に向けての「布石」となります。

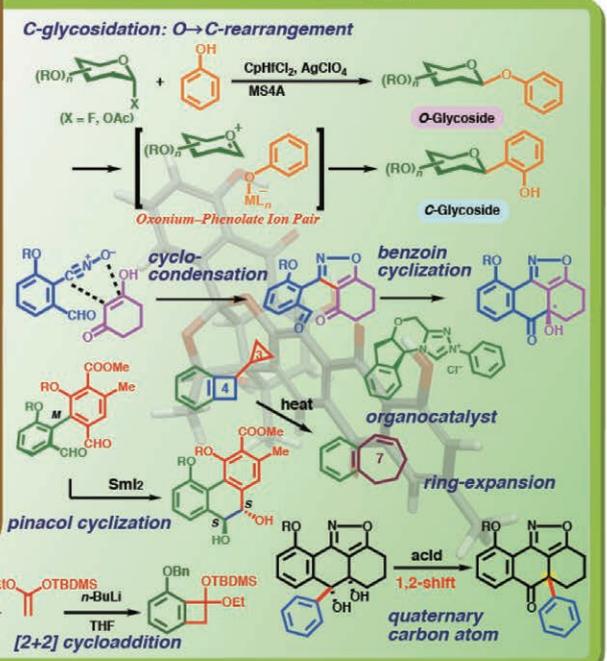
なお、当研究室の特色の一つとして、他大学の出身者が多い点が挙げられます(半数以上は外部から！)。例年、海外からのポスドクも参加します。また、短期・長期の留学生が仲間に加わることもあります。いろいろなバックグラウンドを持つ人達が、お互いに切磋琢磨してそれぞれの高みを目指しています。

私たちは、このような独特の研究環境の中で鍛え上げられた「有機合成のスペシャリスト」達が、今後も社会で大活躍してくれることを期待しています。



生理活性天然物の全合成

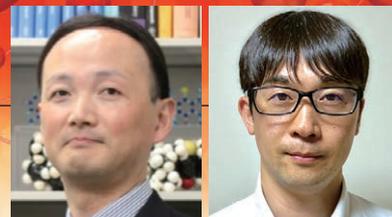
新規合成手法の開拓



後藤・小野研究室

URL <https://www.goto-ono-group.com>

E-mail 後藤 / goto.k.5604@m.isct.ac.jp 小野 / ono@chem.sci.isct.ac.jp

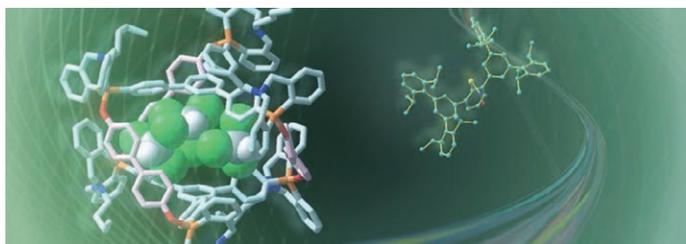


後藤 敬 教授 小野 公輔 准教授

ナノサイズ有機分子の化学： 機能を最大限に引き出すデザイン戦略

1. はじめに

有機化学の大きな特長として、分子を自在にデザインすることで、目的に応じたマイクロ空間を創り出せる点が挙げられます。我々の研究室では、**独自にデザインしたナノサイズ有機分子および超分子を活用して、従来の常識では困難だった物質合成や機能の発現に挑戦**しています。生体反応機構の解明や高反応性金属錯体の開発など、応用範囲は多岐にわたります。有機構造化学、有機元素化学を基盤として、様々な分野において、「他の分子ではできないこと」に挑戦しています。



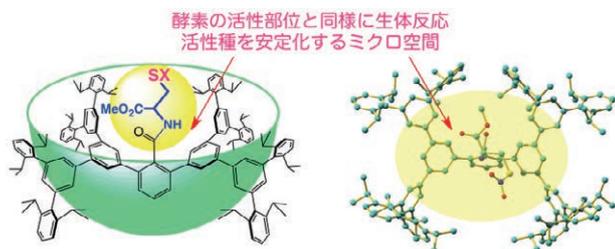
独自デザインのマイクロな反応空間の創製

2. 研究テーマ

(1) ナノサイズ分子キャビティを活用した生体反応活性種モデル分子の合成と生体反応機構の化学的解明

生体反応のメカニズムを解明するためには、様々な解析手段を適用できる人工系でのモデル研究により、反応活性種の構造および反応性について分子レベルの情報を得ることが不可欠です。しかし、生体内では安定に存在して生理作用を及ぼす反応中間体が、人工系では極めて不安定であるためにモデル系を構築することができない場合が多くあります。たとえば、生体内では数十時間も安定に存在し、重要な生理作用を及ぼしている化学種が、人工系では最長でもミリ秒オーダーの寿命しかもたない例などが知られています。

このような活性種が関わる生体反応機構を明らかにするためには、これまでの「非常識」を「常識」に変える革新的な人工モデル系を構築する必要があります。当研究室では、この目的を達成するために、巨大分子キャビティを分子レベルの保護容器として活用し、内部空間に活性なユニットを導入したモデル分子を独自に開発しました。それにより、これまで合成できなかったさまざまな生体反応活性種を手にとれる形に安定化し、従来ブラックボックスだった生体反応



ナノサイズキャビティに活性アミノ酸部位を導入したモデル分子

機構を化学的に解明しています。

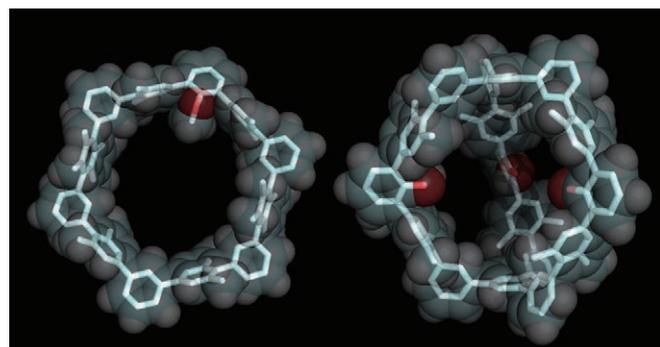
また、分子キャビティを配位子として活用すれば、金属錯体が本来もっていないがこれまで見出されていなかった高い反応性を引き出すことができます。たとえば、キャビティ型カルベン配位子をもつパラジウム錯体を合成し、空気中に0.04%しか存在しない二酸化炭素を、結晶相で固定することに成功しています。

(2) 高周期元素の特性を活用した機能性超分子の開発

巨大な内部空間をもつ分子カプセルや、輪と軸が絡み合ったロタキサン¹の効率的な合成法を開発し、超分子の特性を活かした反応空間の創製に取り組んでいます。ケイ素や硫黄、セレンなど高周期元素の特性を活用することで、複雑な構造をもった超分子構造を効率よく組み上げることが可能になっています。

(3) 共有結合性中空構造体

分子サイズの中空構造体は他の分子を内包することができ、内包された分子は時としてその性質を大きく変えることがあります。たとえば、不安定化学種を安定化したり、逆に不活性化化合物を活性化したりします。私達は、内部空間を同種もしくは異種の官能基で自在に修飾できる独自の共有結合性中空構造体（例えば大環状分子やかご状分子）を合成し、そこに内包した分子の未知の性質を引き出すことを目指しています。また中空構造体の新たな利用法も研究しています。



オリゴフェニレンリング (左) オリゴフェニレンケージ (右)

3. 学生の皆さんへ

自分がデザインした新しい分子を活用することで、世界で多くの研究者が挑みつづ合成できずにいた化学種を、安定に手に取ったときの思いは格別です。もちろんそこに至るまでの過程は試行錯誤の連続ですが、その過程こそが化学研究の醍醐味だと考えています。当研究室では研究テーマは基本的に一人ひとり独立しており、互いに切磋琢磨しながらターゲットに挑戦しています。硫黄やセレン、ホウ素、ケイ素、リンなどいろいろなheteroatomを扱っている研究室らしく、さまざまな大学の出身者が集まっているのも当研究室の特徴です。heterogeneousなバックグラウンドをもったメンバーが、協力し合いながら研究室の歴史をつくっています。

豊田研究室

URL <http://www.toyota.chem.sci.isct.ac.jp>

E-mail stoyota@chem.sci.isct.ac.jp

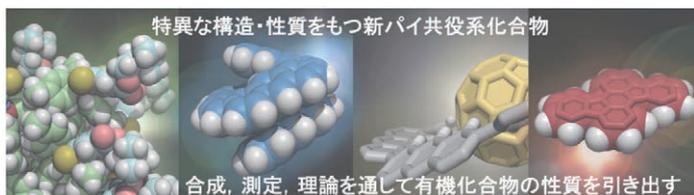


豊田 真司 教授

芳香環の配列を自在に設計して 新しい構造や機能を創る

1. 研究の概要

ベンゼンやアントラセンのような芳香環は一般にパネル状の平面構造をもち、 π (パイ) 電子が豊富な領域があります。複数の芳香環を配列することにより、様々な形、動きや電子の広がりをもつ分子系を設計することができます。当研究室では、このような芳香環の特徴を活かして、**特異な構造や性質をもつ新しい π 共役系化合物の創製**を目指して、構造、合成、物性などの観点から研究を行っています。研究では、有機化合物の構造や反応に関する理論や法則に基づいて、標的分子を精密に設計し、分子の三次元的な構造を意識することを重視しています。また、分子間の弱い相互作用を活用して、分子集合体を構築する超分子化学の研究も行っています。以下、いくつかの研究テーマを紹介します。



特異な構造・性質をもつ新 π 共役系化合物

合成、測定、理論を通して有機化合物の性質を引き出す

研究の概要 ~簡単な芳香環ユニットから無限の構造を設計する~

2. アントラセンの集積—リングとケージ

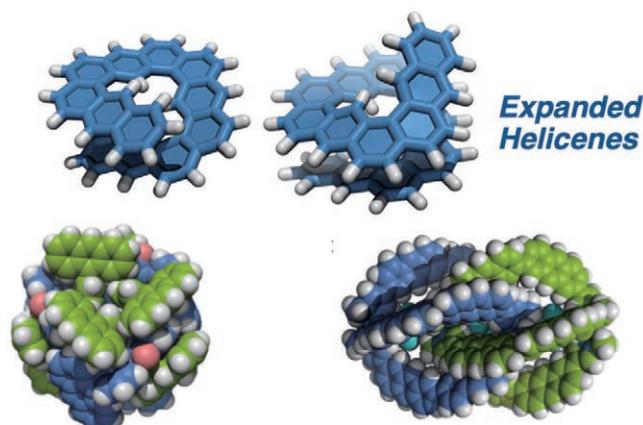
アントラセンユニットを直接連結すると、数や位置によって無限の構造が設計できます。例えば、環状に連結することにより、内部に空間をもつ大環状化合物の合成に成功しました。このリング形分子は、水素と π 電子の間の弱い相互作用によって空間にフラレン C_{60} 分子を取り込み、土星形の錯体「ナノ土星」を形成します。また、アントラセンを用いてケージを構築すると、より強く C_{60} を取り込むことがわかりました。ケージの中で、球状の C_{60} は「ジャイロスコープ」のように回転することが明らかになりました。これらの化合物の構造や性質を調べることで、分子の形や動き、芳香環の間の電子の相互作用などを解明しています。



リングおよびケージとフラレンの会合による錯体の形成

3. 芳香族分子をらせん型に伸ばす

アントラセン環を折れ曲がり形に縮合していくと、ヘリセンのようならせん型の構造が構築できます。このような拡張されたらせん構造をどこまで伸ばすことができるか、エナンチオマーを分割してキラルな構造の性質を解明できるかに挑戦しています。これまでに、5つのアントラセンを縮合した化合物の合成に成功し、新しい「分子ばね」としての機能を研究しています。



芳香族化合物の多彩な構造：らせん、ピンセット、ケージ

4. 芳香族分子を自在に集合させる

アントラセンを先端にもつピンセット形の分子を結晶化させると、6分子が自発的に集まってユニークな環状集合体を形成することを発見しました。様々な「分子ピンセット」を合成して、集合様式や蛍光性に及ぼす効果を調べています。また、アントラセン骨格をもつ配位子と金属イオンを混合するだけで、ケージ構造ができることを明らかにしました。配位子の置換基の大きさを調節することで、予想外のインターロックしたケージが効率よく得られました。

5. 教育の方針

有機化学の研究を通して、高度な専門性、幅広い関連分野の知識および論理的な思考を備えたリーダーシップを発揮できる理工系の人材を養成します。研究室では実験や測定だけでなく、研究報告および発表、質疑討論、論文講読を行い、バランスのとれたラボとデスクワークの両面から、研究者に必要な高度で実践的な能力が身に付くようにします。

南研究室

URL <http://www.bio-syn.chem.sci.isct.ac.jp>

E-mail 南 / minami.a.1ce1@m.isct.ac.jp

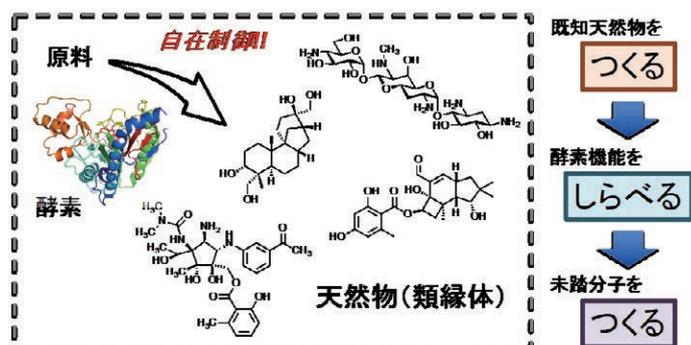


南 篤志 教授

化学の力で生物を超える!! —未踏分子合成のための独自戦略—

1. はじめに

我々の身の回りには微生物や植物などは、炭素、水素、酸素などから構成される天然有機化合物(=天然物)を合成しています。その合成戦略は、極めてシンプルです。すなわち、基本となる炭素骨格を一挙に構築した後に、狙った位置に望みの官能基を“ズバツ”と導入します。この直裁的な合成戦略を実現する鍵は、化学/位置/立体選択性といった化学反応に関わる特徴的な性質を持つ「酵素」と呼ばれる生体触媒の機能にあります。私たちの研究グループでは、酵素による分子変換反応を自在に制御することを目指した基礎・応用研究を精力的に進めています。



2. 研究テーマ

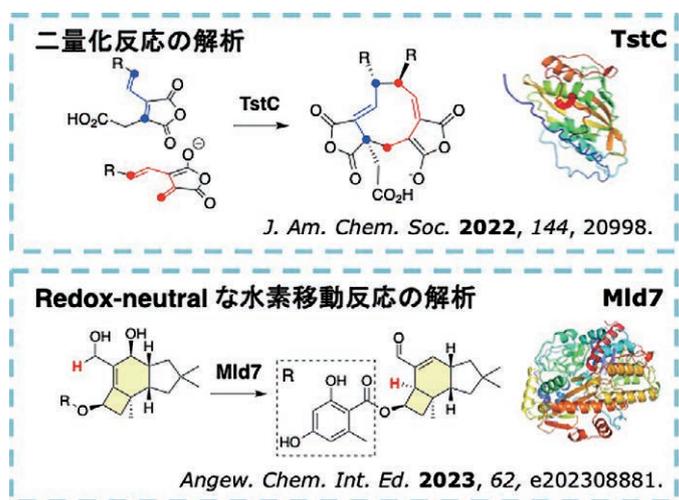
(1) “つくる”にこだわる：生物特有の合成戦略を人為的に再現

酵素を用いた生物特有の合成戦略を人為的に再現し、天然物を合成したい。これは、天然物化学領域における長年の夢の一つでした。私たちのグループでは、天然物を合成するための設計図である生合成遺伝子を汎用宿主へと導入するボトムアップ式の手法を取り入れることで、ひと昔前までは実現不可能であると考えられてきた“夢”を実現しました。確立した天然物合成法を“バイオ合成”と呼んでいます。この10年間で、300種類を超える天然物を最大600 mgの収量でバイオ合成することに成功しました。この中には、化学合成が達成されていない複雑骨格天然物も数多く含まれています。一般には希少と言われている天然物を“簡単に”かつ“量的に”合成できる手法を開発したことにより、新たにアプローチできるようになったこともたくさんあります。最近では、生物の持つ隠された天然物生産能力を覚醒させて新しい天然物を合成する、自然界における天

然物の役割を解明する、天然物を基盤とした新材料を開発するなどにも取り組み始めました。医薬品開発や材料開発などにもつながる応用研究を行うことで、人類の生活向上にも貢献したいと考えています。

(2) 酵素の機能を徹底的に“しらべ”、未踏分子を“つくる”

私たちが開発した手法では、全合成と同じように、天然物をつくるプロセスを段階的に追跡できます。この過程では、当初は予想していなかった思いつけない分子変換反応(例：二量化反応、水素移動反応 etc.)を触媒する酵素が見つかってきます。こうした偶然の発見を大切に、特徴的な反応を触媒する酵素の機能を同位体標識実験やDFT計算などを駆使しながら徹底的に調べています。また、酵素の形を可視化するためのX線結晶構造解析にも取り組んでいます。研究では、2024年にノーベル化学賞を受賞した革新的なタンパク質構造予測プログラムも積極的に活用しています。こうした研究を行うことで、酵素が基質を認識する、反応を触媒するメカニズムをアミノ酸レベルで解明できます。酵素機能の徹底的な解明は、新しい機能を持つ酵素(デザイナー酵素)を人為的に作成するための第一歩です。今後は、酵素という生体触媒を用いて、化学者のように紙の上で書いた未踏分子を自在に合成するための独自戦略を提案し、実現していきたいと思っています。



3. 学生の皆さんへ

私たちのグループが大切にしている学術的な“拠り所”は、有機化学です。化学反応を解明・理解する上で、有機化学は欠かすことができません。ですが、生物による天然物合成を理解して超越する、天然物の機能や役割を解明するためには、他分野で開発された最先端の手法を学び、有機化学と融合することも大切になります。発足したばかりの新しいグループですが、柔軟な感性と活力を持ったみなさんと、有機化学を基盤とした新しい融合研究にチャレンジすることを楽しみにしています。出身分野は問いません。研究室見学、そして研究室への参加を歓迎します。

山下・森本研究室

URL <http://www.oec.chem.sci.isct.ac.jp/>

E-mail 山下/yamashita.m.6dbb@m.isct.ac.jp 森本/yuma.morimoto@chem.sci.isct.ac.jp



山下 誠 教授 森本 祐麻 准教授

元素特性の徹底探索と深い理解により、物質科学と触媒科学を推進！

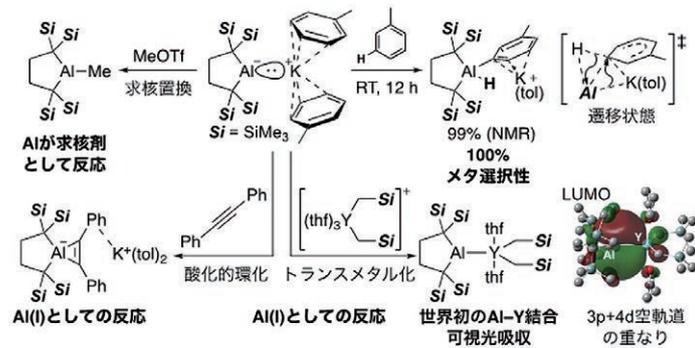
1. はじめに

我々の研究室では、周期表の多種多様な元素の隠された性質を明らかにしながら有機化学・有機金属化学・錯体化学を展開しています。具体的には「有機典型元素化合物の新規結合様式の解明と理解の深化」「工業有機化学志向の均一系触媒開発」「新規多座配位子を有する金属錯体の素反応探究」「典型元素の特性を活かした機能性分子構築」を研究対象としています。世界中で誰も見たことのない新奇な結合や新奇な反応を初めて見つけ出すこと、その反応を真の意味で詳細に理解すること、配位子を巧みに設計して金属錯体の反応性を究極まで高めること、これらを触媒反応開発へ応用して持続可能型社会へと貢献すること、を目指した研究に参加してみませんか？

2. 研究テーマ

(1) 新規典型元素化合物の合成と物性解明・材料化学

これまで人類はどれくらいの種類の分子を手にしてきているのでしょうか？特に膨大な分子の数を扱う有機化学においては研究対象となりうる分子の数は分子量500以下の簡単な分子に限っても 10^{60} 個を超えると考えられていますが、合成できるのはそれらの一部のみに限られます。分子を構成する最も基本的な要素は化学結合であるため、従来には存在しない「新しい結合」を生み出すことは、新しい分子・新しい構造・新しい反応性を生み出すことになるのは明確です。特に周期表の多種多様な元素が有機分子に含まれる際に発現する「元素特性」に関する知見を積み重ね、これを効率的に活用することで新物質の創製と材料化学への発展を志向した化学を目指すのがこの項目の研究の方針です。具体的には電子不足性を示す13族元素、特にホウ素およびアルミニウムを含有する有機化合物に注目して、世界初の化学結合・他に類を見ない分子構造・全く新しい機構で進行する反応・従来観測されていない特異な光学特性などを見いだすことで、教科書を自らの手で書き換えることができます。



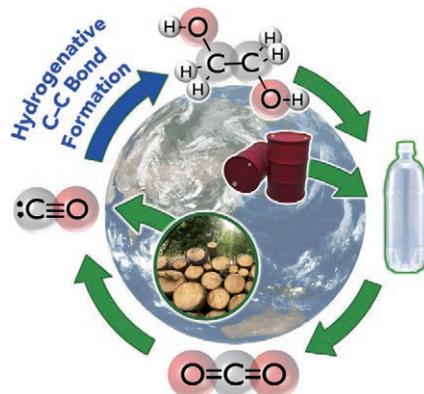
(2) 次世代型石油化学プロセスの創製

地球環境に対して化学者ができることは多いはずですが。例えば石油の主成分であるアルカンの脱水素化反応を高効率で行うことができれば、従来のクラッキングを置き換えることで全世界規模の大きな省エネが可能になるため、アルカン脱水素化のための新しい触媒をデザイン・合成し、触媒機能の向上を目指した検討を行っています。

また、天然ガスの主成分であるメタンは主に燃料としてのみ使用されていますが、これを炭素資源として活用するため、新規な配位子設計を通じた均一系触媒反応の開拓も進めています。この研究では均一系触媒の超高効率化による石油化学の改革を目指します。

(3) 小さな分子を変換し大きな問題を解決する錯体触媒

一酸化炭素、一酸化窒素などのガス状小分子は、炭素、窒素、酸素の基本的な姿です。人類の経済活動に関係するだけでなく、地球上の元素循環においても鍵となる役割を担っています。従って、これらの小分子を意のままに変換する技術の獲得は、炭素資源の枯渇や環境汚染への対策となり得ます。ガス状小分子は極性が低く、捕まえて変換することが難しいものが多いですが、遷移金属錯体はこれを可能とする有力な手段の一つです。小分子と遷移金属錯体がどのような機構で進むのか、合成技術、測定技術を結集することで明らかにします。得られた知見を足がかりに、人類の持続可能性向上に資する触媒開発を目指します。



CO還元的二量化を鍵とする炭素循環

(4) 共同する金属イオンによる分子変換技術

遷移金属元素は多様な酸化状態をとることが魅力であり、これを触媒反応に利用することで人類は多彩な分子変換を可能としてきました。現在一つの金属元素であれば、ある程度自在に電子状態を制御するための方法論が構築されています。しかし、金属元素を2つ並べようとすると、その合理的デザインが途端に難しくなります。分子軌道で記述される単核の金属錯体と、バンド理論で記述されるバルクマテリアルの間には、広大な触媒化学の未開拓領域が存在していますが、我々は金属元素を集積する方向からこのフロンティアの地図作りを進め、斬新な分子変換手法を見出すことを目標とした研究を進めます。

3. 学生の皆さんへ

以上のように、私たちは安定に取り扱える周期表ほぼ全ての元素を対象とした分子化学に関する研究を行っています。元素の多様性を肌で感じながら、世界に一つしかない新しい分子を設計・合成して、従来に無い価値観を創造することができた際の喜びは想像以上です。興味がある人はぜひ東1号館4階の研究室に来て教員や在籍メンバーと話をしてみてください。「へー面白い」と感じたら、それが研究者への第一歩です。私たちと共に真摯に研究に向き合うことで、科学的にも人間的にも大きく成長してくれることを期待しています。

植草研究室

URL <http://www.xtal.chem.sci.isct.ac.jp>

E-mail uekusa@chem.sci.isct.ac.jp



植草 秀裕 教授

有機結晶の設計・機能・動的解析を総合的に展開する

1. 結晶の中の魅力的な世界

有機物が作る分子性結晶では、比較的弱い相互作用で結び付けられ分子が配列するため、結晶でありながらある種の“柔らかさ”を持っています。このため有機結晶は固体でありながら、周囲の環境変化や外部からの刺激により、容易に結晶内での分子の変化や、結晶構造の再配列が可能です。当グループでは、このような動的な挙動に注目しながら、有機結晶の設計・解析・物性について総合的に研究を展開しています。

有機結晶は結晶性材料としても重要で、特に医薬品結晶や色調変化材料として私たちの生活にも深く関わっています。結晶性物質を設計・理解するために最も重要なことは、結晶構造解析により結晶中の分子構造や分子の配列を三次元的に明らかにすることです。このためX線結晶解析の高い技術を基本とし、環境変化型熱分析・各種分光測定・理論計算なども組み合わせて研究します。

2. 研究テーマ

(1) 医薬品原薬の設計・構造・物性

医薬品の多くは結晶の形で生産、加工、貯蔵、使用されるため、有機結晶材料として興味深い研究対象です。現在、医薬品として好ましい性質（溶けやすく、保存安定性が高いなど）を持つ、より優れた医薬品結晶の創製が求められています。私達はクリスタル・エンジニアリングの観点から、結晶設計や結晶変換を行い、さらに結晶構造を詳細に解析することで、よりよい物性への改善や構造と物性の相関を調べています。

結晶設計としては、複数の医薬品原薬成分を結晶中で配列した、多成分系結晶を設計・合成しています（図1）。有機分子の構造や分子間相互作用を理解するため、結晶構造解析による知見やデータベースの利用、理論計算などを行って研究を進めています。

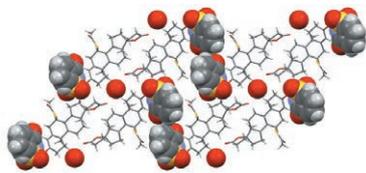


図1. 三種類の成分を含む多成分系医薬品結晶の設計と結晶構造 (prednisolone saccharin hemihydrate)

有機結晶は周囲の環境変化により、結晶構造、そして安定性・溶解度などの物性が大きく変化するため、結晶変換挙動として注目しています。特に湿度・温度変化による水和物結晶の脱水と水和現象では、結晶構造変化により粉末状の結晶しか得られないのですが、近年注目されている粉末未知結晶構造解析法を使い、高分解能な粉末回折データから、結晶の三次元構造の解析に成功しています。

殺菌薬アクリノール結晶の研究では、水和物結晶が構造を保って無水和物結晶I相へと脱水転移する様子、さらに加熱によりII相へ熱構造転移の様子を調べています（図2）。これらの結晶構造は粉末結晶構造解析法により決定し、吸水特性の違いや溶出速度の大きな違いを解明しました。この研究は、多数の有機結晶・医薬品原薬結晶の転移メカニズム解明へと展開しています。

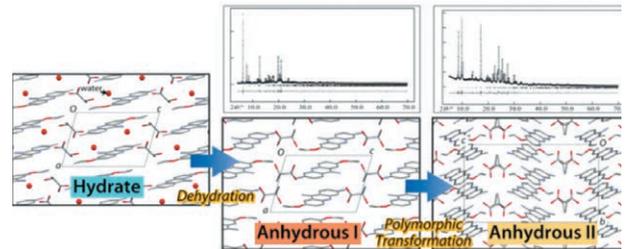


図2. アクリノール水和物結晶からの脱水と転移現象の粉末未知結晶構造解析。無水和物I相は水和物相と構造類似のため容易に水和するが、II相は高湿度下でも安定で溶出速度の速い新規相である。

(2) クロミズムを示す結晶の創製と物性制御

刺激により、可逆的に色調が変化するクロミズム現象の研究は、センサーなどの機能性材料創製への展開が期待されています。結晶への照射で可逆的に結晶の色が変化するフォトクロミック結晶は、「光情報記録媒体」や調光サングラスの材料です。よりよいフォトクロミズム特性をもつ結晶を設計するために、分子構造・結晶構造変化を明らかにした反応のメカニズム解明の研究が重要です。

フォトクロミズムを示す分子の性質を結晶中で制御する研究では、結晶中で光により異性化するコバルト錯体にフォトクロミック分子を配位した新規錯体を合成しました（図3）。結晶に可視光を照射して錯体を異性化させると分子周囲の結晶環境が変化し、フォトクロミズム制御に成功しました。そのメカニズムを結晶の精密な三次元構造解析から定量的に解明しました。これまでサリチリデンアニリン、アソベンゼン、スピロピラン等のフォトクロミズム制御に成功していますが、望みの光物性を示す新規光機能性物質の創成を目指して研究を展開しています。

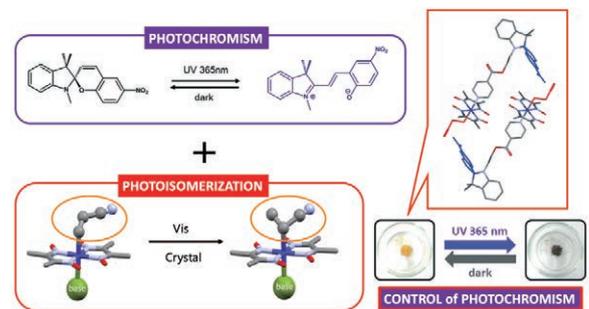


図3. 可視光・紫外光で変化するフォトクロミックコバルト錯体有機フォトクロミズム+コバルト錯体の結晶相異性化反応（左図）、その場フォトクロミズム制御を行う新規錯体の結晶構造（右上図）とフォトクロミック色変化（右下図）

3. 学生の皆さんへ

私達の研究室では、結晶構造を中心とした構造化学が研究の中心です。このため単結晶・粉末結晶構造解析、結晶成長、化合物や固体の多種の物性測定、また合成に近い分野まで、多彩な機器を使って幅広く研究と勉強ができます。ぜひ、結晶の中の魅力的な世界に触れてみてください。



川口 博之 教授

～金属の新しい性質を探る～「錯体化学」

1. はじめに

金属錯体は、有機および典型元素化合物から構成される配位子が金属イオンの周囲を取り囲んだ化合物です。さまざまな性質をもつ金属イオンと多種多様な配位子に組み込むことにより、個性豊かな金属錯体を無尽蔵につくり出すことができます。私たちの研究グループでは、配位子設計に基づいて金属錯体を合成し、その構造と物性・反応性の相関関係について理解を深めようと研究を行っています。特に、新しく設計・合成した金属錯体を「構造が明確な反応場」として用いて、通常では反応性が乏しい窒素分子、一酸化炭素、二酸化炭素などの小分子の新しい反応の開拓を行っています。現在の研究課題としては、(1) 新しい配位子の設計と合成、(2) 多座配位子の配位化学、(3) 電子欠損型ヒドリド錯体の化学、(4) 金属錯体をもちいた小分子活性化、に取り組んでいます。

2. 研究テーマ

(1) 電子欠損型ヒドリド錯体

金属に水素原子が結合した金属ヒドリドは均一系、不均一系を問わず、さまざまな触媒反応や量論反応における鍵化合物として重要な化学種です。ヒドリド配位子をもつ金属錯体の研究の歴史は古く、1930年代の初めにはヒドリド錯体の初めての合成が報告されています。以降、ヒドリド錯体の研究が数多く報告されています。これらの錯体を眺めてみると、その多くはホスフィン配位子、カルボニル配位子などの、いわゆるソフトな配位子により安定化された錯体です。その結果、これらのヒドリド錯体の特徴として、錯体は電子的かつ立体的に飽和したソフトな状態、低原子価状態をとる傾向があり、中心金属の最外殻の原子価軌道がすべて充填された状態をとります(18電子錯体)。

一方、これら電子飽和型ヒドリド錯体と正反対の電子状態をもつ錯体として、電子欠損型ヒドリド錯体を考えることができます。ヒドリド配位子、高原子価金属およびハードな配位子のみから構成される金属錯体です。この様な金属錯体では、大きく分極した金属-ヒドリド結合、電子的かつ立体的に不飽和な配位環境、ルイス酸性の強い金属中心の組み合わせにより、従来の電子飽和型ヒドリド錯体にはない特性を持つことが期待できます。

現在、私たちの研究グループでは、ハードな配位子としてフェノキシド配位子をもつ高原子価ヒドリド錯体に着目し、研究を進めています。

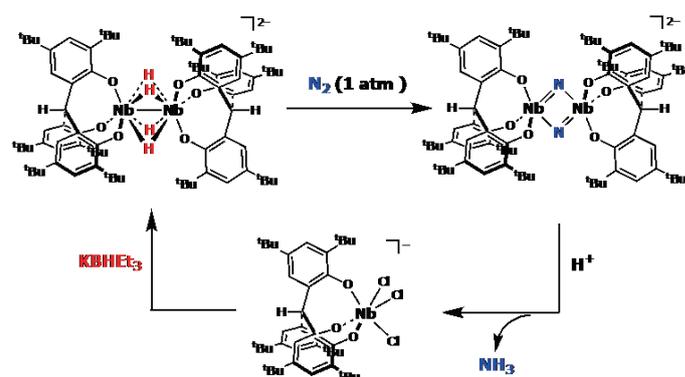
(2) 金属錯体をもちいた小分子活性化

電子欠損型ヒドリド錯体の特異な性質のひとつの例として、その高い反応性を利用した小分子の活性化について以下に紹介します。

三脚型のフェノキシド配位子を持つニオブのヒドリド錯体は窒素分子と穏和な条件下で反応し、 $N \equiv N_3$ 重結合の切断により、ニトリド錯体が生成することを明らかにしました。ヒドリド錯体による窒素分子の活性化は生体触媒や工業触媒における窒素固定化反応の機構と関連し興味もたれています。本反応はヒドリド錯体を用いた

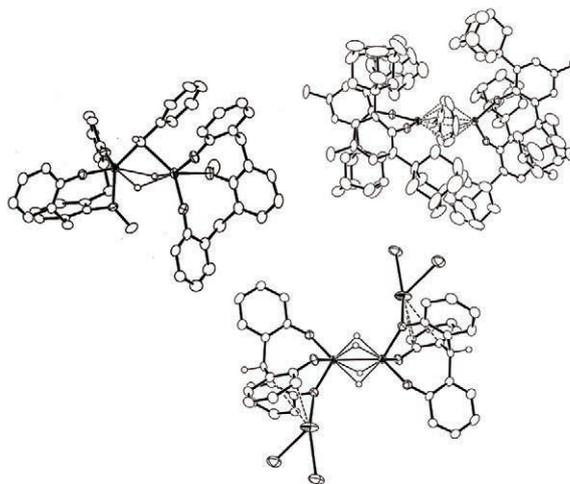
窒素分子切断の初めての報告例です。

さらに、窒素分子から合成したニトリド錯体は、酸と反応するとアンモニアを生成します。さらにヒドリド試薬を作用させるとヒドリド錯体が再成することを見出しました。以上の反応を組み合わせることにより、電子欠損型ヒドリド錯体を用い、 N_2 を NH_3 へ変換する合成サイクルの構築を達成しました。



3. 学生の皆さんへ

錯体化学は、有機化学および無機化学における知見を活かして、金属イオンと配位子を選択し、ひとつの分子に組み立てることにより、これまでに誰も見たことがない、予想もしなかった物性や反応性をもつ物質を生み出すことに挑戦する科学です。その研究対象は機能性材料から触媒まで多岐にわたります。私たちの研究グループでは、「自分たちがつくり出した、自分たちの金属錯体」にこだわり、この広範な分野に自分の科学を築く意欲ある人を待っています。



私たちの研究室で合成した金属錯体

河野研究室

URL <https://www.kawanolab.chem.sci.isct.ac.jp/index.html>

E-mail mkawano@chem.sci.isct.ac.jp

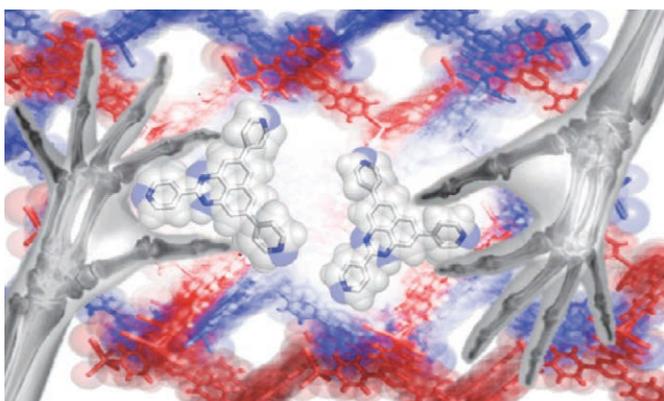


河野 正規 教授

～非平衡下でのものづくりー空間とポテンシャルの制御～ 「結晶性超分子化学」

1. 我々の目指すところ、それはオンリーワンの化学

自然界では温和な条件下で不活性な基質を活性化し、非常に精密な「化学反応」を行っています。そのポイントの一つは弱い分子間相互作用により形成される準安定状態です。これまでの物質科学の発展のおかげで、物質に介在する分子間相互作用についての理解が深化してきましたが、それを積極的にものづくりに利用していくことはまさに今世紀始まったばかりといえるでしょう。その理由は、人工系では高度に制御された準安定な構造体を作り出すことや構造の解明が難しいからです。そこで我々は、鍵となる分子を設計・合成することにより分子間の相互作用を速度論的に制御して、これまでにない細孔性材料の開発を行い、デバイスへの応用や構造・物性相関の解明などを目指し、次の基礎的な研究を行っています。



研究イメージ図：酸化還元特性を有する配位子からなるネットワーク錯体のX線による直接観察

2. 研究テーマ

(1) ナノ空間を速度論的に作る研究

従来の配位子と金属イオンから形成される細孔性ネットワーク錯体は、熱力学的支配のもと自己集合の原理に基づいて合成されてきました。実はその過程の中には様々な中間体が存在しています。その中間体を利用することにより、熱力学的支配下の生成物とは異なる構造体を構築することができます。また、速度論的に構造を組み上げることにより、原理的に細孔内にゲストと相互作用するサイトを生成することができます。そのような細孔体は、従来には見られないような吸着・分離・反応・物性などを示すことが期待されます。現在、独自の配位子を設計・合成して、酸化還元特性を有するユニークな細孔体の研究を行っています。

(2) ナノ空間を利用した反応と見る化学

細孔体を合成するだけでなく、細孔体のナノ空間内で様々な反応を検討し、メカニズムの研究を行っています。特に、我々の主な分析手段の一つであるその場観察構造解析法を利用し、反応を直接「見る」研究を行っています。「百聞は一見に如かず」が本課題のキーワードです。

(3) ナノ空間の物性研究

細孔性ネットワーク錯体は、通常バンドギャップが大きく絶縁体ですが、配位子の酸化還元電位を適切に制御することにより電導性を示すようになります。そのような配位子を金属イオンで無限にネットワーク化することで出現する基礎的物性の研究を行います。特に、物性の検討は、固体状態の電気化学測定に基づくため、解釈がとても難しいですが、様々な手法と組み合わせることによりチャレンジしていきたいと思います。

(4) ナノ空間を利用したデバイス設計

ナノ空間を有する結晶性材料は、その表面積の広さからシグナル強度の増強による高感度化や基質選択性などが期待できることからデバイス材料として有望です。特に、我々が研究している細孔体は酸化還元特性を有することから電導性を示します。しかも、構造や方向性によって電導度が大きく変化する異方性を示します。これらの特徴を生かして、細孔体で形成された薄膜を作製することにより新しいタイプのセンサーの開発を目指しています。また、新しい設計指針を提供できるように、センシングのメカニズムを分子レベルで検討する基礎的な研究を行っています。

(5) 結晶相やアモルファス相の未知構造研究

物質を合成した後は、回折法による構造決定を行います。また、準安定な構造はよく相転移を起こし、大きな構造変化とともに物性も変化します。構造解析の対象は、単結晶、結晶性粉末、アモルファスと様々です。そのため我々は、放射光や実験室系のX線を用いて未知構造解析を行います。特に、粉末未知構造解析は、原理的に実験から得られる回折情報が単結晶法に比べて少ないことから結晶学の専門的知識が要求されます。実際面白い物性を示す材料は粉末状であることがしばしばあり、粉末未知構造解析法はこれからさらに成熟していくべき研究領域であります。また、全散乱法とEXAFSによるアモルファス相の研究も新たに始め、固体の構造研究をマクロからナノサイズまで横断的に行います。

3. 学生の皆さんへ

我々の研究室では、構造と物性の解明のために、有機合成から錯体合成、放射光などを利用した高度な構造解析、顕微分光測定・理論計算による電子状態の解明まで、様々な知識が必要になります。まさに化学のあらゆる英知を結集して協奏的に取り組まなければならない「化学の百貨店」です。これまで築き上げてきた幅広い国際的ネットワークを利用して共同研究も積極的に行っています。国際的共同研究・交流を通して、メンバーは新しい知識・文化と接することにより、自然と国際感覚を学ぶことができます。科学に国境はありません。

モットーは、「よく学び、よく遊ぶ」です。化学が好きで、未知の研究分野を開拓することに興味のある方は、「オンリーワンの研究～新たな研究領域の創生～」を是非一緒に追求しませんか？



近藤 美欧 教授

金属錯体×精密配列＝未踏触媒！

1. はじめに

我々が豊かな社会生活を送るうえで重要な様々な有用化合物は、「触媒化学」を駆使して合成されています。つまり、触媒化学は、人類社会の持続的発展に貢献できる重要な研究分野です。私たちの研究室では、この触媒化学を更に発展させるため、以下の3つの重要な目標に向かって研究を行っています。まず1つ目の目標は既存の反応の反応効率を飛躍的に向上させることです。2番目の目標は、新たな原理に基づく触媒反応の開発です。そしてこれらの研究において、触媒反応の機構を詳細に理解することは極めて重要であり、これが3番目の目標になります。私たちは、これら3つの目標を達成するために、**触媒反応を分子の「集合」の力を使って制御**します。この集合の力によって、様々な機能を1つの材料に複合化させ、高性能な触媒を生み出します。

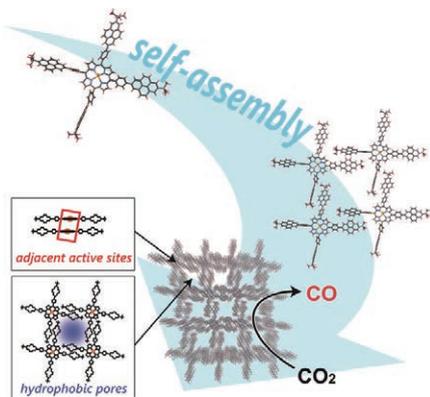
そのための鍵となるのは「**金属錯体**」です。金属錯体は様々な反応の重要な触媒として機能することが知られています。金属錯体によって促進される反応は、**人工光合成反応・有機物質変換反応**など多岐に渡ります。私たちは、集合の力を使って金属錯体触媒の持つ力を最大限に引き出すことを目指しています。

つまり、「**集合**」の力を使って、**今までに誰も見たことがない金属錯体触媒材料を生み出す**ことが私たちの目標です。

2. 研究テーマ

(1) 「活性中心」と「反応場」の複合

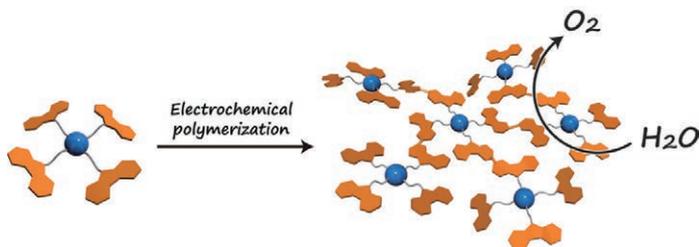
物質変換反応において、触媒反応を担う「活性中心」の近傍に反応基質の認識サイトとなる「反応場」を導入することは、良好な触媒材料開発の鍵であると言えます。そこで私たちは、活性中心として機能する触媒部位と分子間相互作用部位として機能する分子コネクタ部位とを連結した金属錯体（分子性触媒モジュール）を集合の力によって配列させ、活性中心と反応場が複合化された材料、「フレームワーク触媒」を新たに発案・開発しました（右図）。



そしてこのフレームワーク触媒が、光水素発生反応、一般的に困難とされる水中での二酸化炭素 (CO_2) 還元反応、光化学的 CO_2 還元反応、高い結合解離エネルギーを有する不活性C (sp^3)-H結合への高収率でのC-H挿入といった多種多様な反応を高効率で進行させることを発見しました。このように、私たちは触媒分子を戦略的に集合させることで、**活性中心と反応場を自在に複合化し、画期的触媒を創出**しています。

(2) 「活性中心」と「電荷伝達サイト」の複合

天然の金属酵素においては、活性中心を取り囲むアミノ酸残基が電荷伝達などを担う反応媒体として重要な役割を果たしています。そして、この反応媒体の存在によって、温和な条件下での高難度触媒反応が達成されています。私たちは、この天然の金属酵素にヒントを得て、反応媒体を戦略的に制御することが可能な触媒材料の開発を行っています。これまでに、電解重合によって金属錯体触媒を集合させ、活性中心の周囲に反応媒体となる電荷伝達サイトを導入するための新戦略を発見しました（下図）。そして、この戦略に基づき開発したポリマー型材料が極めて良好な酸素発生触媒として機能することを明らかにしました。またこの触媒は、これまでに報告された類似の触媒系と比較して飛躍的に活性が高いことも判明しました。更に、均一系触媒反応における反応媒体の特異的な効果を見出すことにも成功し、既存触媒系と比較して60,000倍以上触媒回転頻度 (TOF) の高い鉄錯体触媒系の開発に成功しました。また同様の概念を用い、既存触媒の100万倍以上大きなTOF値を示す銅錯体触媒系を得ました。このように、**反応媒体を集合の力などを使って戦略的に制御**できれば、今後さらに高性能な触媒材料が生み出されると期待できます。



3. 学生の皆さんへ

当研究室の活動の方針は、「**主体的に楽しく**」です。学生さん一人一人が独立した研究テーマを持ち、それを自由な発想で飛躍させてくれることを応援しています。特に、「研究を立ち上げ・進め・まとめるプロセスをともに創る」ことを研究室全体の目標として掲げます。これは、一つのプロジェクトを始めから終わりまできちんとやり遂げ、全体像をつかむ力を皆さんに身に付けてほしいと考えているからです。このような全体像をつかむ力を獲得することで、将来的に社会で活躍できるトップレベルの人材になることができます。また、皆さんの個性を重視し、それぞれの方が得意な力を最大限伸ばせるような環境づくりをし、また苦手な部分については少しでもその苦手意識を減らすことができるようサポートします。このような方針の下、当研究室では、スタッフと学生の皆さんが日々積極的に議論し、質の高い研究を行います。そして研究成果について、きちんとまとめ上げ、国内外での学会や学術論文として発表することを奨励します。また、研究室内で勉強会や雑誌会を行い錯体化学・触媒化学などに関する専門知識を身に着ける場も数多く提供します。近藤研究室は2023年6月に発足した新しい研究室です。皆さんと新しい研究をともに創ることを心から楽しみにしています。

火原研究室

URL <http://www.analytical.chem.sci.isct.ac.jp/>
E-mail hibara.a.31f8@m.isct.ac.jp



火原 彰秀 教授

分析・計測のフロンティア

1. 分析・計測のフロンティア

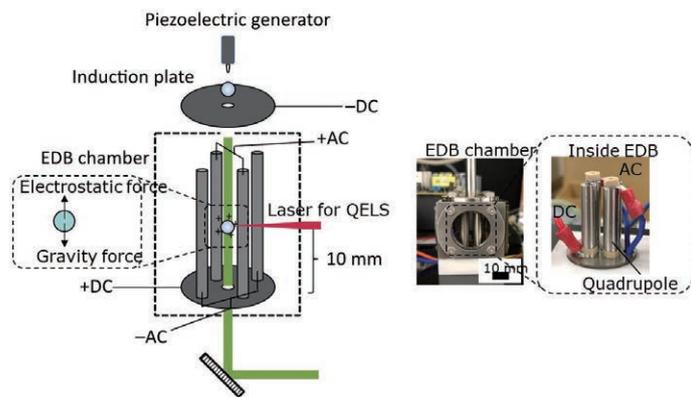
分析化学は、物質の定量・定性・物性解明や、時間分解計測・イメージングなどに関する方法論的研究分野です。研究テーマは、自然中あるいは人工プロセス中に存在するナノ・マイクロサイズ物質へのアプローチや、超分子の得意な性質に基づくアプローチなど多岐にわたります。試料や計測手法に関する考え方・思考手段を深く追求し、オンリーワンの研究を展開しています。

2. 研究テーマ

(1) ナノ・マイクロサイズ界面計測法

エアロゾル（エーロゾル）が気温などの大気環境に与える影響は長年にわたり議論されてきました。気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の第6次報告書の記述によると、気候への影響因子のうち科学的確信度が中程度より低いものとして、ブラックカーボンによる光学効果や、ラジカルの存在量や関連する化学変化、などの項目が挙げられています。

表面張力は液体の物理化学特性を表す。界面活性の化学種が吸着することで表面張力が低下する現象を利用して、界面への化学種の局在を議論できます。われわれのグループでは、表面張力波が自発共鳴を起こす現象を独自に発見し、それを利用した光散乱測定法である準弾性光散乱法（Quasi-elastic light scattering, QELS）法を開発した。液滴の液面を通過したレーザー光に含まれる散乱光のドップラシフトを検出して、球面型共鳴モードの振動数から表面張力を求めることができる手法である。



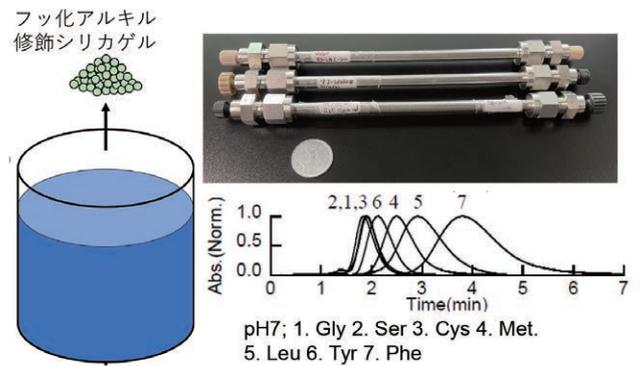
(2) 有機フッ素化合物の分析化学・リサイクルプロセス

ポリテトラフルオロエチレン（PTFE）、パーフルオロオクタン酸（PFOA）やパーフルオロオクタンスルホン酸（PFOS）のような有機フッ素化合物は、他の化合物群では実現できない特性をもつため幅広く利用されています。しかし、分子構造まで立ち返って、この特性を物理化学的に説明することは必ずしも上手くいっていません。

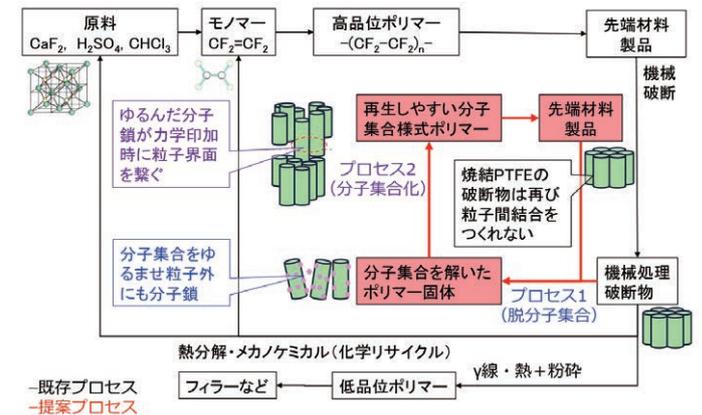
パーフルオロアルキル鎖（Rf: $\text{CF}_3(\text{CF}_2)_n$ ）の主な特徴は、 $-\text{CF}_2-$ のC-F間の大きな電気双極子（dipole）と、H原子に比べてF原子の半径が大きく立体障害が存在することによるねじれ（らせん）構造です。

この特徴からRf鎖同士の分子間相互作用は、van der Waals相互作用のうち配向効果が主なものです。

われわれのグループでは、有機フッ素化合物の特徴を正しく理解し活用する分析化学や化学プロセスを研究しています。Rf鎖の $-\text{CF}_2-$ 基は大きなdipoleを活用する液体クロマトグラフィーにより、PFAS-生体分子間の相互作用を網羅解析する手法実現に挑戦しています。このために、界面化学・溶液化学・多変量解析を駆使した研究を進めています。



PTFEのリサイクルは炭化水素系ポリマーに比べて困難です。われわれは、NaClとPTFEを混合した乾式ボールミリングにより、固体のままリサイクルするプロセスが可能となることを見いだしました。PTFEの強い分子集合がNaClとのメカノケミカル反応により緩む現象に注目して解析をすすめています。



(3) マイクロ流路型蛍光偏光イムノアッセイ法

可搬型蛍光偏光アッセイ装置と測定用マイクロ流体デバイスを開発しています。また、その装置・デバイスを利用してワンステップイムノアッセイを実証しています。例えば、小麦食品中にスパイクしたカビ毒（DON）を迅速に分析やウイルス・病原体の検出に挑戦しています。

3. 学生の皆さんへ

我々の研究室では、科学の広い分野に対して大きなインパクトを与えられるよう研究に取り組んでいます。種々の工夫を凝らすことで困難な計測を可能にしています。研究室を見に来てください！

前田研究室

URL <https://www.maeda.chem.sci.isct.ac.jp/>

E-mail maeda@chem.sci.isct.ac.jp



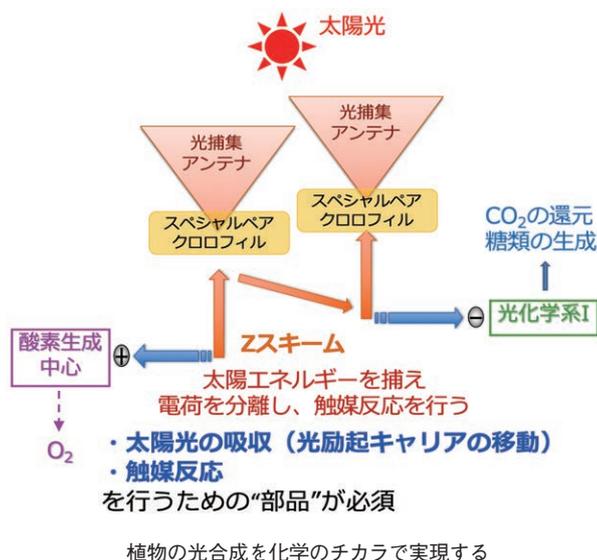
前田 和彦 教授

植物の光合成を学び、真似し、そして超える！ ～人工光合成を実現する化学のチカラ～

1. はじめに

植物が行う光合成は、地球における炭素循環を担う重要なプロセスで、これをヒトの手で行うことは化学者の夢のひとつです。化学の観点で大雑把に捉えると、植物は光エネルギーを吸収する部位と触媒反応（水の酸化とCO₂の還元）を行う部位を有しており、それらは精巧な電子移動経路で結ばれています。すなわち光合成を模倣することは、これらをヒトの手で作出すことに他なりません。また、光合成がエネルギー変換反応である点に着目すると、“人工光合成”は植物が行うCO₂固定のみならず、水の分解による水素製造などにも拡張できます。

現在の我々の科学技術では、植物の光合成を完璧に複製することはできません。一方で、精密設計した人工物質を駆使することで、植物の光合成の機能を超えることが可能となります。すなわち、高効率な人工光合成系の構築は地球温暖化・化石燃料の枯渇によるエネルギー危機など、人類が直面する深刻な問題に対するアプローチとなります。当研究室では、可視光吸収能や触媒能など様々な機能をもった固体材料、ナノ材料、分子を自在に組み合わせ、CO₂固定や水分解に有効な人工光合成系の構築に挑戦しています。以下に代表的な研究テーマを紹介します。



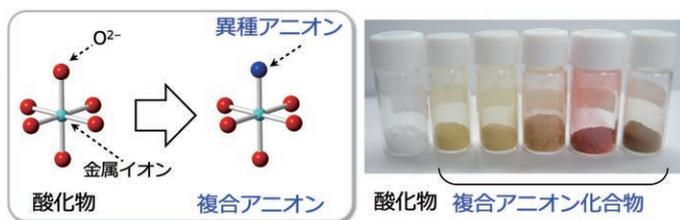
2. 研究テーマ

(1) 複合アニオン化合物を光触媒とした水分解・CO₂固定化

複合アニオン化合物とは、単一の化合物内に複数のアニオン種を含む化合物のことで、単一アニオンの化合物（酸化物など）では見られない革新的な機能発現が期待できます。複合アニオン化合物に特有な可視光吸収能（小さなバンドギャップ）は極めて有用で、人工光合成系を構築するための“部品”となります。一方で、複合アニオン化合物のほとんどは制御された環境下で生み出される人工物質のため、合成は容易ではありません。しかしこのことは、新たな光触媒が複合アニオン化合物の中から見出される可能性を示唆しています。

当研究室では、酸化物、酸ハロゲン化物などの様々な複合アニオン化合物の合成とそれらの光触媒機能開拓に取り組んでいます。当研究室で見出した複合アニオン光触媒のいくつかは、既存の光触媒を超える性能を示し、世界の研究者からも注目を集めています。

また最近では、ある種の複合アニオン化合物がCO₂の多電子還元活性な電気化学触媒となることを見出すなど、既存物質では不可能だった高難度物質変換反応の実現可能性も見えてきました。

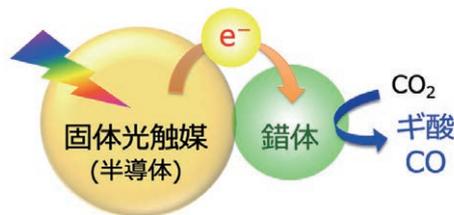


可視光を吸収する複合アニオン化合物

(2) 固体材料と分子の融合光触媒の開発

CO₂還元は関与する電子数の違いにより多様な生成物を与え、かつプロトン（水）の還元と競合します。したがって、CO₂還元を効率良く進行させるには適切な反応場、すなわち触媒活性サイトの構築が不可欠となります。金属錯体はこのような活性サイトとして有用で、例えばルテニウムやルテニウムからなる錯体は、CO₂を一酸化炭素やギ酸へ効率良く還元する触媒として働きます。

高効率なCO₂還元（光）触媒となる金属錯体ですが、光酸化力が弱い場合、単独で水を酸化するには大きな困難を伴います。当研究室では、金属錯体の弱点となる光酸化力を複合アニオン化合物などの半導体に担わせ、同時に半導体光触媒の弱点、すなわち還元力の強化を金属錯体に担わせるというコンセプトで、錯体/半導体融合光触媒の開発に取り組んでいます。



金属錯体/半導体融合光触媒を用いたCO₂還元

3. 学生のみなさんへ

好奇心の赴くまま、楽しく研究すること。これが研究室のモットーです。そして、物質合成、解析、機能評価の全てのスキルを世界トップの水準で身につけることができるのが当研究室の強みです。当研究室はまた、国内外の他の研究室との交流も活発です。一研究室という狭い世界にとどまらず、多くの人との協働を通じて研究能力を養い、高い課題解決能力と豊かな人間性を兼ね備えた人材として、みなさんが社会に羽ばたけるサポートをします。まだ見ぬ新物質や高性能光触媒を発見した時の感動、達成感を一緒に味わいましょう！

八島研究室

URL <http://www.yashima.chem.sci.isct.ac.jp/index.php>

E-mail yashima@chem.sci.isct.ac.jp

見学は大歓迎です！ e-mailで希望日時をご連絡ください。



八島 正知 教授

新物質を発見して世界を変えよう！ 精密な結晶構造解析で物性を解明

原子・電子レベルでセラミック系エネルギー材料・環境材料・バイオ材料・電子材料、触媒をデザイン！

1. 研究のアプローチと特徴：独自の新物質探索と精密構造物性

エネルギー・環境・バイオ等、現代社会は多く課題を抱えています。その解決には**革新的な物質・材料の創出**が不可欠です。鍵となるのは、材料の結晶構造（原子配列）と電子状態を精密に捉え、**構造と機能の本質的な関係を解き明かす**ことです。八島研では、近年飛躍的に進展した精密結晶構造解析技術を駆使し、実用材料の構造と電子状態を詳細に解析。材料特性が生まれるメカニズムを明らかにしながら、**新物質を探索**しています。さらに、多くの材料が高温で合成・使用される点に着目し、高温下で試料を保持したまま結晶構造をその場観察する「**高温構造物性**」にも注力。材料特性との相関をリアルタイムで解明します。結晶構造に基づく次世代材料のデザインと開発を通して、エネルギー・環境問題の解決に挑みます。八島研では、学生自身の自由な発想で、**周期表に含まれる安全な元素のほぼすべて（74種類以上）を駆使し、多彩で独創的な材料開発を推進**しています。

2. 研究室の構成と特徴：多彩な分野の出身者で新分野を開拓

【メンバー】 八島教授、齋藤助教、蘇特任助教、中崎研究員、秘書1名、博士院生2名、修士院生6名、学部4年生2名、他2名（2025年度）

【出身分野】 化学、材料、物理、セラミックス、応用物理、電気、金属等

【就職先】 科学大（東工大、4名）、理研、大連理工大、ラシャヒ大、産総研、熊本大、福島大、中央大、TSMC、AGC、トヨタ、日立製作所、三菱ケミカル、ENEOS、大阪ガス、リガク、田中貴金属、旭化成、京セラ、昭和電工、パナソニック、東芝、三菱マテリアル、NTT、大同ホールディングス、JR東日本、三菱重工、NEC、シャープ、オリンパス、横河電気、TDK、三菱自動車、YKK、マツダ、キーエンス、日本原燃、コニカ、住友化学等約64社

【共同研究】 国内約40大学、国立研、民間企業、欧米・アジアの大学

【学会】 セラミックス協会、結晶学会、化学会、金属学会、国際結晶学連合IUCr、固体イオニクス討論会・国際会議、中性子科学会など

【使用装置】 中性子回折・散乱装置（7台）、（放射光）X線回折・分光装置（10台）、高温回折測定用加熱装置（6台）、高温電気伝導・誘電特性測定システム（5台）、熱分析装置（DSC、TG-DTA（2台）、熱膨張）、紫外・可視分光光度計、合成用電気炉（13台）、高温ラマン散乱装置、ボールミル、ガスクロ、顕微鏡、ドラフト（2台）、パソコン・机・椅子（1人1つ以上）等

【受賞】 この8年間で81件（特に2025年は15件）。化学会学術賞・ポスター発表賞2名、結晶学会学術賞・進歩賞・ポスター賞5名、セラミックス協会学術賞・進歩賞2名・発表賞53名、金属学会功績賞・奨励賞、手島研究賞7名、PACRIM発表賞4件、アジア結晶学会ポスター賞、SSPC最優秀ポスター賞2名、触媒工業協会技術賞、Spriggs賞など合計117件



3. 教育方針：世界的な研究者・科学技術者を育てる

世界トップレベルの研究を目指し（ビジョン：高い目標と大きな夢）、学生自らが研究を（1）立案し、（2）実行し、（3）世界へ発信する力を磨きます。研究室セミナーでは文献紹介や英語での研究報告を行い、成果は国内外の学会で積極的に発表しています（スペイン、英国、スイス、ドイツ、ブルガリア、シンガポールなど）。学生は試料合成から回折・散乱測定、精密な静的・動的構造解析、物性測定、量子力学計算までを主体的に担当。材料開発に直結する実践力と幅広い研究スキルを養います。さらに年間10～60日程度、国内外の最先端大型施設や大学（英国、豪州、韓国、SPRING-8、つくば、東海など）で高温放射光X線・中性子回折実験を実施。普段は自主性を重んじ、学外では全員で協力して大規模実験に挑みます。研究成果は新聞や総説・教科書に取り上げられ、Nature系やJACSなどの国際一流誌への掲載、物質構造特許へと発展しています。さあ、共に心躍る最先端研究に挑戦しましょう。

4. 研究テーマ：構造と電子を調べて新材料の探索・開発

(1) 中性子と放射光を駆使して精密構造解析：独自の高温装置

当研究室では、「**高温での精密構造解析システム**」をいくつも開発しました（図1）。その結果、原子、イオン、電子の広がりや構造を、空气中1900Kという高温に試料を加熱したまま正確に求めることができ、「**高温での精密構造物性**」、「**新物質・新材料の構造デザイン**」という**新分野を切り拓く**ことに成功しました（図2、3）。

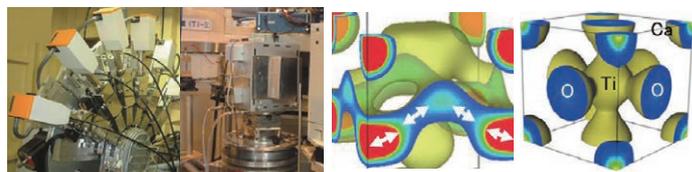


図1：高温・超高分解能放射光X線回折システム（左）と高温中性子回折システム（右） 図2：1000°Cで可視化したイオン伝導経路（矢印） 図3：1401°Cで可視化したCaTiO₃の共有/イオン結合

(2) 新型イオン伝導体を探索・発見し、エネルギー問題に挑む！

エネルギー・環境分野の鍵を握るのは、固体中をイオンが自在に移動する**イオン伝導体**です。私たちは、**中性子・放射光・レーザーを駆使した最先端実験**に加え、**第一原理計算や機械学習ポテンシャル**を用いた分子動力学計算を組み合わせ、イオンの位置とダイナミクスを原子レベルで解明しています。八島研は、世界に先駆けて**燃料電池やリチウムイオン電池**におけるイオンの位置と拡散経路を決定し、伝導機構を明らかにしてきました。さらに、**触媒ナノ材料**や**強誘電体**などについても、結晶構造・相転移・物性の相関を解明する「**構造物性研究**」を展開しています。結晶構造解析と**コンピュータースクリーニング**を融合し、新しいイオン伝導体や蛍光体を設計・創製（新物質探索：図4-6）。その成果は物質特許・構造特許の出願・取得へとつながっています。あなたも新物質を発見し、発明者として未来のエネルギー技術を切り拓きませんか。

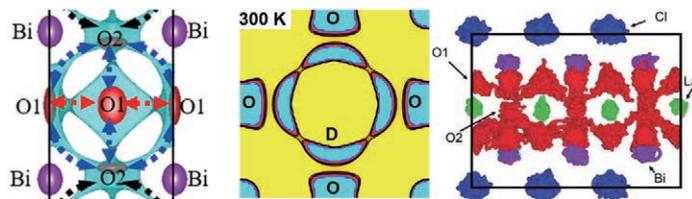


図4 CsBi₂Ti₂NBO_{10-δ} 800°C 世界最高クラスのイオン伝導体を見、Nature Commに発表 図5 BaSc_{0.8}Mo_{0.2}O_{2.8} 世界最高のプロトン伝導体を見、Nature Commに発表 図6 Bi_{0.9}Te_{0.1}LaO_{4.02}Cl 世界最高の酸化物伝導体を見、Adv. Funct. Mater., JACSに発表

(3) 化学結合を可視化：放射光X線・中性子による新材料設計

材料の特性は、**イオン結合・共有結合に加え、電荷移動（電荷・軌道・スピン・イオンサイズ）や欠陥（空孔・面欠陥など）の精緻な組合せ**で生まれます。私たちは、放射光X線・中性子から得られる精密電子密度解析により、こうした結合状態を“可視化”します。例えば、CaTiO₃（ペロブスカイト）では、1401°Cでの放射光X線解析によりTi-O間の共有結合を直接可視化することに成功しました。さらに、クリーンで再生可能な水素エネルギー源として期待される光触媒やナノ材料の化学結合を解明し、可視光応答を生み出す構造的要因を明らかに。新しい光触媒の設計へとつながっています。加えて、密度汎関数理論（DFT）に基づく第一原理バンド計算により、化学結合と構造、相安定性、光・電気・熱特性、生体親和性、機械的性質の本質に迫ります。理論と実験を融合し、材料特性を自在に制御することで、新物質創製へ挑戦しています。

一緒にワクワクする研究を行って明るい未来と社会を作りましょう！

野上・寺田研究室

URL <http://www.ksvo.titech.ac.jp/jpn/index.html>

E-mail 野上/knogami@ksvo.titech.ac.jp 寺田/terada.a.77b1@m.isct.ac.jp



野上 健治 教授 寺田 暁彦 准教授

実験室は本物の火山 ～火山現象の化学・熱学的研究～

1. 研究方針と研究課題

■火山化学 (野上)

主たる研究目的は、地表で採取した火山ガス・温泉水を地球化学的に分析することでマグマの状態を知ることにあります。

活火山の地下にはマグマが存在し、そのマグマは揮発性成分 (H_2O 、 CO_2 、 SO_2 、 H_2S 、 HCl 、 H_2 、 N_2 、希ガスなど) を放出しています。この現象をマグマ脱ガスと言います。マグマ脱ガスが速やかに進むとマグマ全体に泡が発生し、マグマの比重が小さくなるので地表まで上昇してきます。これがマグマ噴火です。逆に、マグマ脱ガスの速度が小さい時は、揮発性成分だけが火山体内を上昇し、火山ガス、温泉水、火口湖水として地表に表れます。このように、揮発性成分がマグマから地表へと至る通路を熱水系と呼びます。

熱水系では、地下水混入や気相-液相分離などの複雑な現象が起きるので、本来の揮発性成分の化学組成や同位体比組成は大きく変化します。これらの化学的なプロセスを解明することが、火山ガスや温泉からマグマの状態を知るために重要です。

■火山熱学 (寺田)

マグマには火山ガスが溶け込んでいます。これが発泡することでマグマが激しく膨張し、しばしば莫大な力学エネルギーが生まれます。これが火山爆発です。一方で、噴火を起こしていない火山からも、火山ガスが静かに、大量に放出されています。このような日常の「ガス抜き」は、火山活動の多様性に関係します。そのため、火山ガスの放出量や輸送過程を研究することが重要です。

火山ガスは大きなエンタルピーを有しているので、地表付近では様々な熱現象として認識されます。主な現象として、上空へ立ち昇る真黒い噴煙、白いモクモクとした噴気、あるいは美しい火口湖などが挙げられます。これら熱現象を、実際の活動火山に出かけて観測、解析して、噴火前～噴火中に火山地下浅部で進行するプロセスを理解することが目標です。

火山は特殊な環境にありますから、市販の装置が使えない場面も珍しくありません。そもそも、確立された観測方法が存在しない場合も多いのです。新たな観測装置を開発して、今まで誰も測れなかった量を測ることも楽しみの一つです (図1)。



図1. 御嶽山平成26年噴火の際には、急遽、ドローンに火山ガス分析装置を搭載し、人間の手では不可能な、危険な火口でのガス観測に成功しました。

2. 教育方針

既存の方法を単に適用するのではなく、学生の興味に基づき、実験や現場観察を通じて研究対象や方法を考えます。危険なことはしませんが、自然が相手ですので、良いデータを取るために様々な苦労があるでしょう。それも含めて、現場で体験してほしいと思います。

火山現象には様々な要因が関与するため、火山の研究手法は多彩です。そのため、専門分野の深い知識を土台として、様々な視点から総合的に考えることが重要です。月1回、大岡山で開催される多元レジリエンス研究センター火山・地震部門のセミナーに出席し、専門性の異なる研究者との議論に参加します。多元レジリエンス研究センター火山・地震部門としての構成は、当センターのホームページをご覧ください。

3. 研究生生活

本研究室は、大岡山 (南5号館) と草津白根火山観測所 (群馬県草津町) の2箇所に拠点を持っています。学生には大岡山と観測所の両方に机を用意しますので、必要に応じて、観測所へ出かける形になります。

交通費は研究室が負担します。観測所にはシャワーを完備した宿泊棟があり、近くに無料の温泉施設もあります。食事が自炊となる以外に、学生に金銭的負担はありませんので、ご安心ください。

我々の実験室は本物の火山ですので、必要に応じて全国の活火山へ出掛けます。他研究室とはちょっと違う、ユニークな大学院生活を送ることになるでしょう。



図2. 草津白根火山観測所

ユーハス研究室

URL <https://www.compute.chem.sci.isct.ac.jp/>

E-mail juhasz@chem.sci.isct.ac.jp



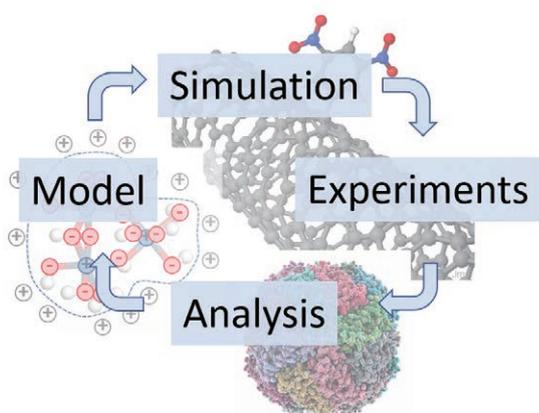
ユーハス ゲルゲリ
JUHASZ, Gergely 准教授

Computational Chemistry: From Molecular Insights to Better Materials

1. Introduction

Chemistry is often referred to as the central science because it connects so many other fields, enabling the creation of molecules and materials that shape our modern world. From batteries powering our devices to medicines saving lives, from solar panels capturing renewable energy to environmentally friendly polymers reducing our ecological footprint, chemistry is at the heart of innovation.

Our research aims to deepen the understanding of the complex behavior of atoms and molecules. Using the tools of computational chemistry, theory, and mathematics, we strive to uncover the fundamental principles governing materials. With this knowledge, we seek to create better materials and improve processes that benefit society.



Chemical simulation and data analysis in chemistry

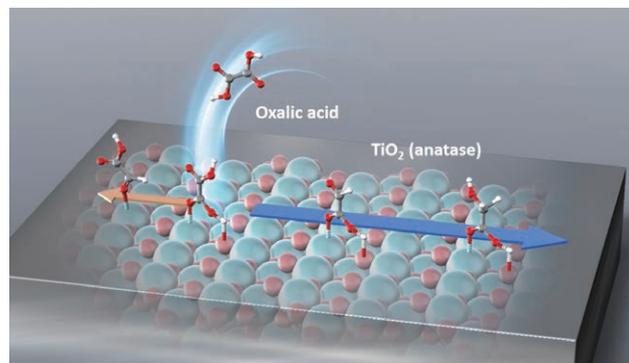
2. Research

(1) Mechanisms of Catalytic Reactions

Catalysts drive many chemical reactions that are critical for energy, materials, and environmental applications. Our research focuses on transition metal-based catalysts, particularly those using sustainable, earth-abundant metals like iron, for biomimetic oxidation catalysis. Using density functional theory (DFT) simulations, we investigate the atomic-level mechanisms of these reactions. By uncovering intricate pathways and energetics, we aim to design more efficient and environmentally friendly catalytic systems.

(2) Optical Properties and Reactivity of Nanomaterials

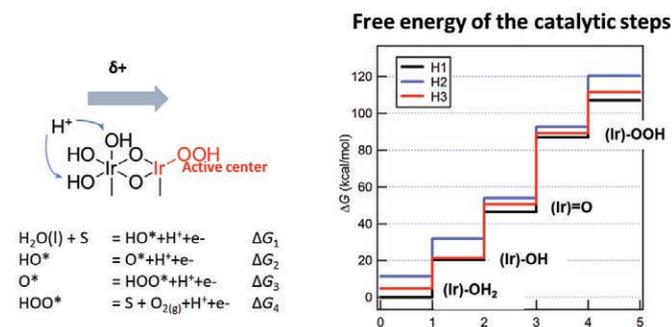
Our studies on oxide nanoparticles and surfaces focus on their electrocatalytic properties, particularly in reduction reactions on materials like TiO₂ and similar electrodes. These materials have potential applications in energy storage and conversion, as well as environmental technologies. Using computational methods, we explore how their optical and chemical properties emerge from their atomic structures and how these properties can be tuned for specific uses.



Reactions of oxalic acid on TiO₂ electrode surface

(3) Machine Learning and AI in Chemistry

The rapid advancement of machine learning and artificial intelligence offers new ways to tackle complex problems in chemistry. We aim to enhance traditional DFT-based simulations by integrating machine learning methods that improve accuracy while significantly increasing computational efficiency. This integration allows us to address challenges that were previously considered intractable, opening new frontiers in the simulation and prediction of chemical behaviors.



Energetics of concerted proton-electron movement on IrO_x

3. Message to students

Are you curious about how chemistry connects with physics, mathematics, and IT? Do you want to uncover the secrets of atoms and molecules, seeing the world through an imaginary microscope that reveals processes invisible to the naked eye? If so, our laboratory might be the perfect place for you.

Here, we explore the molecular world with the freedom to imagine and test all kinds of chemical systems and scenarios. Using computational simulations, we break free from traditional experimental limitations, venturing into the vast possibilities of theoretical and computational chemistry. Join us in uncovering the mysteries of the molecular world and experiencing the thrill of discovery. Let's explore, innovate, and create together.

■入試全般に関する正確な情報と詳細は、本学ホームページの受験生向けの入試課ホームページをご覧ください。募集要項は4月に公表予定です。

<https://admissions.isct.ac.jp/ja/news/5eskyzpiqufq>

■化学系の大学院入試に関する情報は、下記化学系ホームページに掲載しています。

<http://www.chemistry.titech.ac.jp>

■TOEFL iBTやTOEIC L&Rの正式の成績証明書(スコアシート)の提出を必須(締切日厳守)としているので、早めの受験をすすめます。

■化学系では、多様な分野を学んでいる方の受験を歓迎します。試験問題は、有機化学、物理化学、無機・分析化学の各分野から出題します。

■研究活動が中心となる大学院教育では、自分にあった適切な研究室を見極めることが非常に重要です。化学系は、意欲のある学生を広く全国から求めます。積極的に教員に連絡をとって相談してください。

■化学系大学院は、専門とする分野・内容によって化学コースとエネルギー・情報コースがあります。このため志望する教員によっては、化学コースのみを担当している場合と、化学コースとエネルギー・情報コースを兼任している場合があります(募集要項参照)。

■大学院の入試は化学コースとエネルギー・情報コース一括して行われます。兼任している教員に配属される場合、コースの選択は合格者決定後に行われます。従って、コースの選択は合否に一切影響しません。

化学系の大学院修士課程入学試験の特徴

■修士課程学生の選抜は、『口述試験』および『筆答試験』により行います。入学志願票、成績証明書、および志望理由書により、口述試験受験資格者を選抜し通知します。

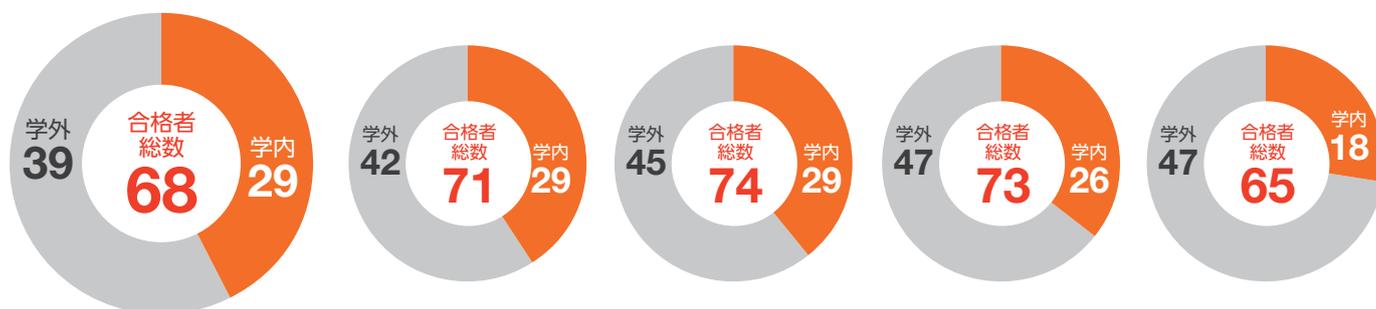
■理学系だけではなく、工学系・薬学系・農学系の出身者も多く在籍しています。さらに、物理や応用物理、生物を学んでいる方の受験も歓迎します。様々な分野に広く門戸が開かれているのが化学系の長です。

■化学系では、修士課程学生の約6割が、本学以外の大学出身者で占められています(下図参照)。

■過去の入試問題を公表していますので、下記のHPからダウンロードしてください。

https://www.titech.ac.jp/graduate_school/admissions/past_exam_papers.html

2026年度 受験者数 **114** 2025年度 受験者数 **78** 2024年度 受験者数 **100** 2023年度 受験者数 **87** 2022年度 受験者数 **77**



合格者出身大学一覧

青山学院大学、アーカンソー大学(米国)、茨城大学、宇都宮大学、愛媛大学、大阪公立大学、岡山大学、お茶の水女子大学、学習院大学、神奈川大学、神奈川工科大学、華北理工大学、関西学院大学、関西大学、北里大学、岐阜薬科大学、九州工業大学、九州大学、京都大学、群馬高専、群馬大学、慶應義塾大学、工学院大学、神戸大学、神戸市立高専、国際基督教大学、埼玉大学、静岡大学、芝浦工業大学、島根大学、上智大学、信州大学、千葉大学、中央大学、中国石油大学(中国 華東)、朝鮮大学校、筑波大学、電気通信大学、東海大学、東京学芸大学、東京工科大学、東京大学、東京電機大学、東京都市大学、東京都立大学、東京農業大学、東京農工大学、東京薬科大学、東京理科大学、東邦大学、東北大学、徳島大学、名古屋大学、名古屋工業大学、長岡技術科学大学、奈良高専、新潟大学、日本大学、日本女子大学、兵庫県立大学、弘前大学、広島大学、武漢工程大学(中国)、法政大学、北海道大学、三重大学、明治大学、明治薬科大学、山梨大学、横浜市立大学、横浜国立大学、立教大学、立命館大学、早稲田大学、浙江大学(五十音順)

修士課程カリキュラム

授業科目を効率的に学修できるように、1年間を4つの期間に分けるクォーター制を導入しています。また、全ての授業科目を、100番台（導入・基礎科目）、200番台（基盤科目）、300番台（展開科目）、400番台（発展科目）、500番台（自立科目）、600番台（熟達科目）にナンバリングし、科目間の学修順序(prerequisite)を明確化しています。

修士課程では、400番台と500番台の科目を通して、学士課程で学んだ化学に関する基礎知識をもとに、物理化学、無機・分析化学、有機化学分野に関して、最新の研究に基づくより先端的な知識・技術を体系的に学びます。さらに化学講究および化学専修実験として研究室において最先端の研究に取り組み、専門性を深めるとともに、創造力を高めることができます。これらの学修により、以下の能力の修得を目標としています。

- ・ 化学に関わる多方面の知見を理解するのに必要な基盤的な専門学力
- ・ 物質科学に関する高度な専門学力に基づく実践的な問題解決力
- ・ 新たな課題に主体的に取り組み、化学の深奥を究めようとする探求力
- ・ 多様な考え方をまとめて新たな方向性を見出す力
- ・ 国際的に通用するコミュニケーション力

化学系大学院科目の例（400番台・500番台）

科目名
無機・分析化学基礎特論Ⅰ、Ⅱ
物理化学基礎特論Ⅰ、Ⅱ
有機化学基礎特論Ⅰ、Ⅱ
分離科学特論
結晶構造特論
地球環境化学特論
機能錯体特論Ⅰ、Ⅱ
分子化学特論Ⅰ、Ⅱ
量子化学特論Ⅰ、Ⅱ
物性化学特論Ⅰ、Ⅱ
生物有機化学特論
合成有機化学特論
有機金属化学特論
構造有機化学特論
固体光学特論
固体構造物性特論

科目名
エネルギー基礎学理第一～第二
エネルギーマテリアル論第一～第二
エネルギーシステム論
エネルギーシステム経済論
エネルギーデバイス論第一～第二
放射光科学実習
カレントケミストリーⅠ～Ⅳ
化学特別講義第一～第十二
化学プレゼンテーション演習
化学特別演習
化学講究S1およびF1
化学専修実験第一～第二
化学環境安全教育第一
化学講究S2およびF2
化学専修実験第三～第四

博士後期課程

博士後期課程では、以下の能力の修得を目標としています。

- 化学に関する体系化された幅広く深い知識をもとに、広く物質の関わる現象の本質・普遍性を見抜き、新たな課題を発見・探求し、これを解決に導く力
- 高い見識と倫理観のもとに広く物質の関わる化学のフロンティアを先導する力
- 化学と多方面の知見を化学の視点から有機的に結びつけ、これを活用し、展開する力
- 化学の専門分野において国際的にリーダーシップを発揮する力

大学院の国際化

化学系では、大学院生を含む若手研究者の国際交流を促進し、グローバルに活躍できる人材育成を行っております。機会があれば修士課程の大学院生でも短期留学支援を受けることができます。また、多くの大学院生が国際学会で発表し、海外の研究者と交流しています。

外国人講師による講演会も豊富に企画されており、国内にいながら国際色豊かな環境で、研究・教育を行っています。

経済的支援

希望者の多くが日本学生支援機構奨学金を得ることができます。また、修士課程・博士課程の大学院生を問わず、化学系が担当している学生実験等でのTA（ティーチングアシスタント）の枠も豊富で、経済的支援を得るための様々な機会に恵まれています。経済的支援の概要については学生支援センターのウェブサイトを参照してください。

<https://students.isct.ac.jp/ja/012/tuition-and-scholarship>

修士課程から博士課程への進学

修士論文の内容および博士課程での研究計画に関するプレゼンテーションで、円滑に進学することが可能です。なお、化学系の修士課程を修了した多数の大学院生が、日本学術振興会特別研究員として研究奨励金を受けています。また、経済的な支援を様々な形で受けることが可能です。本学独自奨学金である「東京科学大学つばめ博士学生奨学金」など、博士後期課程学生への経済的支援については本学のウェブサイトを参照してください。

https://www.titech.ac.jp/graduate_school/support/support_doctoral.html



代表的な修士論文・博士論文題目一覧

植草研究室

- 医薬品原薬クラリスロマイシンの新規無水和物相の導出と脱水・水和転移挙動の解明
- キノロン系抗菌剤の色変化を伴う脱水・水和転移挙動の解明
- 粉末未知結晶構造解析による医薬品原薬ジダノシン共結晶の構造モチーフ
- デュアル光反応基を持つコバルト錯体を用いた *trans-cis* 固相異性化反応の研究
- Photochromic reactivity switching of *N*-salicylideneaniline derivatives by crystalline environmental change (結晶環境変化による *N*-サリチリデンアニリン誘導体のフォトクロミズム発現制御)

川口研究室

- ニトリド配位子が架橋した $[Ti_2N_2]$ 骨格をもつアニオン性チタン二核錯体の合成と反応
- アリールオキシド配位子を用いた前周期遷移金属ヒドリド及び低原子価錯体の合成と反応に関する研究
- アニオン性ニオブおよびタンタルヒドリド錯体の反応における対カチオン効果
- アリールオキシド混合型ピンサーおよび三脚配位子をもつ5族金属錯体の合成と反応
- アリールオキシド配位子を用いたタンタルヒドリド錯体の合成と一酸化炭素の反応

近藤研究室

- 触媒分子の戦略的配列による酸素発生触媒システムの設計と構築
- 金属ポルフィリン錯体を用いた電気化学的二酸化炭素還元における反応場の効果
- 金属ポルフィリン錯体の戦略的集積化と電気化学的 CO_2 還元
- Rh二核錯体サイト内在型フレームワーク触媒を用いた Rh_2 カルベノイド種を経由する有機分子変換
- Rhパドルホイール錯体から構築されるケージ化合物の合成と応用

火原研究室

- マイクロ水滴濃縮における水分配解析
- 微小流体界面の自発共鳴振動を利用した分光計測
- マイクロ流体を用いた蛍光偏光イムノアッセイのための表面修飾法の検討
- 有機フッ素化合物を修飾した分離・センシング表面
- 蛍光偏光イムノアッセイ法における高感度化に向けた吸着抑制表面の研究

前田研究室

- 有機半導体 C_3N_4 を中核とした CO_2 還元光触媒系の構築
- 半導体光触媒に対する酸化コバルトナノ粒子の担持効果
- 三種複合アニオン化合物の合成と水分解光触媒系の構築
- 色素増感型酸化ナノシート光触媒によるZスキーム型水分解の効率化
- 広域可視光を利用可能な酸フッ化物による光電気化学的水分解

河野研究室

- Design of Electronic Devices Using Redox-active Organic Molecules and Its Porous Coordination Networks
- 酸化還元活性配位子を用いた新規ネットワーク錯体の合成戦略と物性評価
- 協奏的活性空間を有する細孔性ネットワーク錯体の創製と応用
- 多点相互作用性配位子を用いた細孔性ネットワーク錯体の合成とそのゲスト吸着
- 多点相互作用性配位子の光物性及びその会合挙動を利用したネットワーク錯体の創製

八島研究室

- "Norbby gap" 内の高酸化物イオン伝導を示す Sillén オキシハライドの創製
- $Pr_2NiO_{4+\delta}$ 系混合伝導体の巨大酸素透過性および光触媒 $Ga_{1-x}Zn_xN_{1-x}O_x$ の可視光応答性の構造的要因
- 結合原子価法による新規 $LaSr_2Ga_{11}O_{20}$ 系イオン伝導体の探索と構造物性
- ドナードーピングにより創製したペロブスカイト型超プロトン伝導体の発見
- Anisotropic Thermal Expansion of K_2NiF_4 -Type $CaAlO_4$ (*R*: Rare Earths) and Electron Density of Perovskite-Type Oxides Studied by Synchrotron X-Ray and Neutron Powder Diffraction (放射光X線および中性子回折による K_2NiF_4 型酸化物の異方性熱膨張およびペロブスカイト型酸化物の電子密度の研究)

野上・寺田研究室

- 拡散放出ガスの測定法開発のための実験的研究
- 草津白根火山から放出される火口湖水および温泉水の形成過程
- 土壌気体水銀観測から推定される新火口形成域 - 測定手法の改良と草津白根火山への適用 -
- 草津白根山の山頂および東西山麓に湧出する温泉水の化学組成に基づく火山熱水系のモデリング
- アトサヌプリ火山および雌阿寒岳に発達する火山熱水系の地球化学的研究

沖本研究室

- 非線形光学効果から見た鉄複電荷酸化物の電子強誘電性の研究
- 非線形光学から見た電子強誘電体 $YbFe_2O_4$ の電場印加効果
- 電子強誘電酸化物 $YbFe_2O_4$ 薄膜のテラヘルツ波発生
- 時間分解非線形光学分光から見た水素結合型有機強誘電体の光励起ダイナミクス研究
- 非線形光学効果からみた水素結合型有機強誘電体の励起状態の研究

西野研究室

- 電気伝導度・SERS同時計測システムの開発およびBDT単分子接合への適用
- 電流-電圧特性計測に基づく単分子接合の電子状態解析法の開発
- 単分子接合の光化学反応の探索
- 多脚分子を用いた分子接合の作製およびその伝導制御
- DNA単一分子の変異検出法の開発

石内研究室

- 冷却イオントラップ法によるバリノマイシン-金属イオン錯体およびその水和クラスターの赤外分光
- アドレナリン受容体部分ペプチド・リガンド錯体の冷却イオン分光
- カリウムイオンチャネル選択フィルター部分ペプチドと金属イオン錯体の冷却イオントラップ分光
- 天然変性タンパク質 α シヌクレイン部分ペプチド-低分子リガンド複合体の冷却イオントラップ分光-リガンド結合による二次構造誘起

大島・山崎研究室

- イオンイメージング実験をもとにした分子回転波束の再構築法の開発
- 分子ダイナミクス研究に向けた新規光電子・光イオン空間断層イメージング装置の開発
- 2波長レーザーイオン化を用いたベンゼン-水素クラスターにおける結合エネルギーの決定
- アンモニア分子の反転振動に関する状態識別と分布制御
- 高感度(e,2e)電子運動量分光装置の開発と内殻イオン化過程の研究

北島研究室

- 高分解能しきい光電子分光法によるHDの光電離の研究
- 二電子励起と一電子励起の微分断面積の比に現れる強い角度効果:100 eV電子- NH_3 衝突
- 低エネルギー電子衝突による解離性イオン化過程研究のための電子・解離イオン同時計数実験手法の確立
- 希ガス原子および水素・重水素分子に関する低エネルギー電子衝突の研究
- 水素分子の光解離により生成するH(2p)原子ペア状態

谷口研究室

- Opto-electronic and magnetic characteristics induced by noncentrosymmetry in two-dimensional organic-inorganic hybrid perovskites (二次元有機・無機ハイブリッドペロブスカイトにおける非反転対称性が誘起する光電流特性と磁気物性)
- キラル金属錯体を用いた可視光領域における磁気キラル光学効果の研究
- 酸化還元活性な分子格子の開発とリチウムイオン電池を用いた電氣的磁気物性制御
- リチウムイオン電池を利用した遷移金属化合物の磁性制御
- 銅カルコゲナイドにおけるコンバージョン反応型マグネシウム二次電池正極材料の開発

大森・安藤研究室

- ベニバナの赤色素カルタミンの全合成研究
- ナフトキノンの光レドックス反応を用いたスピロキシンCの全合成研究
- コケ類由来の環状ビスベンジル類の合成研究
- Studies on Total Synthesis of Bisanthraquinone Antibiotic BE-43472B
- 紅ナツメ由来カテキンヘテロオリゴマーの合成と構造解析に関する研究

後藤・小野研究室

- 新規なナノサイズ分子キャビティを活用した高反応性システイン誘導体に関するモデル研究
- Bowl型分子キャビティを活用した含セレン抗酸化酵素活性中間体および関連化学種の反応性に関する研究
- キャビティ型分子骨格による速度論的安定化を基盤とした含硫黄高反応性化学種に関する研究
- Bowl型N-複素環カルベン配位子を有する遷移金属錯体の合成と反応
- 動的共有結合を活用した多段階刺激応答性[2]ロタキサン合成研究

豊田研究室

- アントラセン大環状オリゴマーの合成とフラレンとの錯形成
- アントラセン-トリプチセン大環状ケージによるフラレンの包接とゲストの動的挙動
- 高度に伸長したアントラセン縮合型拡張ヘリセンの構造とらせん反転挙動
- ルビセン構造を高度に集積した π 共役拡張多環芳香族炭化水素の合成と物性
- 置換アントラセンを有する分子ピンセットの固相自己集合と固体物性

南研究室

- 多機能性巨大酵素が備えている反応選択性に関する普遍的規則の解明
- 酸化酵素による天然物の構造多様性創出機構に関する研究
- Biosynthetic studies of fungal terpenoids and meroterpenoids having antiinsectant and antitumor activity (抗虫活性および抗腫瘍活性を有する真菌テルペノイドおよびメコテルペノイドの生合成研究)
- 炭素-炭素結合形成反応を触媒するラジカルS-アデノシル-L-メチオニン酵素の機能解析

山下・森本研究室

- Synthesis of Ir complexes bearing a long-tethered P-B-P ligand and their application as a catalyst for dehydrogenation of alkane (側鎖の長いP-B-Pピンサー配位子を有するIr錯体の合成とアルカンの脱水素触媒としての応用)
- Elucidating the reactivity of diarylboryl gold complexes (ジアリールボリル金錯体の反応性の解明)
- Synthesis and Property of an Alkyl-Substituted Alumanyl Anion (炭素置換アルマニルアニオンの合成と性質)
- Electronic effect of axial ligands of high-valent iron-oxide porphyrin complex on hydroxylation reaction of inert alkane substrates (高原子価鉄オキソポルフィリン錯体による不活性アルカンの水酸化反応に及ぼす軸配位子の電子的効果)
- Effect of Carboxylate Coordination on the Redox Function of Di(μ -oxido) dinickel(III) Complexes (ジ(μ -オキシド)二核ニッケル(III)錯体の酸化還元機能に及ぼすカルボキシレート配位の効果)

学生の受賞 / 教員の受賞

学生の受賞

受賞者名	受賞した賞 (受賞日)	受賞題目
吉川 祥太郎 (M1) 石内研究室	PCCP Poster Prize (Pacifichem 2025) (2025年12月20日)	Cryogenic ion trap infrared spectroscopy of shared proton structures in deprotonated acidic amino acids
渡邊 佑 (M2) 豊田研究室	第18回有機 π 電子系シンポジウム Chemistry Letters Young Researcher Award (2024年12月13日)	水素結合と π 相互作用の協働によるピレン含有ピンセット形分子の多孔性分子結晶構築
青木 望 (M2) 八島研究室	AsCA 2025 Best Poster Award (2025年12月6日)	Discovery, crystal structure, and proton conduction of novel Ba ₂ Y ₂ CuPtO ₈ -Type materials
古城 綜佑 (M2) 植草研究室	第4回ソフトクリスタル研究会 学生発表賞 (2025年11月22日)	X線結晶構造解析と超解像顕微鏡によるスピロピランの結晶相デュアルクロミズムの観察
前田 凌 (M2) 八島研究室	日本金属学会 第3回「水素の関わる材料科学の課題共有研究会」最優秀若手表彰 (オーラルの部) (2025年11月20日)	ドナードーピングにより創製したペロブスカイト型新物質の発見とプロトン伝導
古城 綜佑 (M2) 植草研究室	第33回有機結晶シンポジウム 最優秀講演賞・CrystEng Comm Presentation Prize (2025年11月2日)	結晶相デュアル光異性化反応によるスピロピラン誘導体のフォトリソ制御
黄 文青 (M1) 近藤研究室	2025年度「東京科学大学学生リーダーシップ賞」 (2025年10月31日)	海外大学との交流活動について
安田 亘輝 (M1) 近藤研究室	第15回CSJ化学フェスタ2025 優秀ポスター発表賞 (2025年10月27日)	Rh二核錯体を触媒活性点として有するケージ化合物の合成と性質
鈴木 啓朗 (D2) 河野研究室	10th Asian Conference on Coordination Chemistry (ACCC10), ACS publication Prize (2025年10月26日)	Influence of Protonation and Coordination to Ruthenium on the Electrochemical and Structural Properties of Azaphenalenyl Compounds
馬場 大知 (D2) 河野研究室	10th Asian Conference on Coordination Chemistry (ACCC10), RSC Prize for Poster (2025年10月26日)	Structure Determination of Isolated Avermectin Derivatives by Encapsulation into a Highly Porous Metal-Organic Framework
原田 翔 (M2) 前田研究室	第15回 CSJ化学フェスタ2025 優秀ポスター発表賞 [無機化学・触媒化学・分析化学] (2025年10月24日)	TiO ₂ の構造特性が色素増感型光触媒の活性と電子移動ダイナミクスに与える影響
成瀬 泉心 (M2) 谷口研究室	第19回分子科学討論会 分子科学会優秀講演賞 (2025年10月20日)	二次元有機・無機ハイブリッドペロブスカイト鉛ヨウ化物におけるバルク極性が誘起する円偏光ガルバノ効果
鈴木 啓朗 (D2) 河野研究室	10th Asian Conference on Coordination Chemistry (ACCC10), ACS publication Prize (2025年10月26日)	Influence of Protonation and Coordination to Ruthenium on the Electrochemical and Structural Properties of Azaphenalenyl Compounds
馬場 大知 (D2) 河野研究室	10th Asian Conference on Coordination Chemistry (ACCC10), RSC Prize for Poster (2025年10月26日)	Structure Determination of Isolated Avermectin Derivatives by Encapsulation into a Highly Porous Metal-Organic Framework
宇田川 英寿 (M1) 八島研究室	日本セラミックス協会第38回秋季シンポジウム 特定セッション「先進的な構造科学と分析技術」最優秀ポスター発表賞 (2025年9月25日)	シレンオキシハライドにおける超高速酸化物イオン伝導の発見
青木 望 (M2) 八島研究室	The 22nd International Conference on Solid State Proton Conductors (SSPC-22), Best Poster Award (2025年9月18日)	Discovery of Novel Structure-type Fast Proton Conductor
西村 祥吾 (M2) 火原研究室	第36回クロマトグラフィー科学会議 Best Presentation Award for Young Scientists (2025年9月17日)	低密度修飾フッ素カラムの特性評価
馬場 大知 (D2) 河野研究室	錯体化学会第75回討論会 学生講演賞 (朝倉書店賞) (2025年9月16日)	Visualization of Avermectin Analogs by Encapsulation into a Metal-Organic Framework Based on Zn ₆ Clusters
古城 綜佑 (M2) 植草研究室	2025年光化学討論会 優秀学生発表賞 (ポスター) (2025年9月6日)	Control of Solid-State Photochromism of Spiroyrans by Crystalline-State Photoisomerization
青木 望 (M2) 八島研究室	日本セラミックス協会関東支部研究発表会 奨励賞 (2025年9月3日)	新構造型プロトン伝導体の創製と伝導機構解明
前田 凌 (M2) 八島研究室	日本セラミックス協会関東支部研究発表会 最優秀賞 (2025年9月3日)	ドナードーピングにより創製したペロブスカイト型新物質における高プロトン伝導と完全水和
馬場 光希 (M1) 八島研究室	日本セラミックス協会関東支部研究発表会 特別賞 (2025年9月3日)	新しい超プロトン伝導体、Nb ⁵⁺ 添加BaScO _{2.5} の発見
王 笑朴 (D1) 沖本研究室	Journal of the Physical Society of Japan, Editors' choice (2025年9月2日)	Polarization Structure Probed by Incident Angle Dependence of Second Harmonic Generation in Electronic Ferroelectric YbFe ₂ O ₄
廣瀬 拓也 (M2) 山下・森本研究室	錯体化学若手の会夏の学校2025 優秀講演賞 (2025年8月29日)	ジ (μ -オキシド) 二核ニッケル (III) 錯体による水素引抜き反応に錯体の構造歪が与える効果
黄 文青 (M1) 近藤研究室	錯体化学若手の会夏の学校2025 優秀ポスター賞・Chemistry Letters Young Researcher Award (2025年8月29日)	ナフタレンジイミド部位を持つ新規鉄ポルフィリンの開発
佐藤 巧 (D2) 大島・山崎研究室	原子衝突学会第50回年会 優秀ポスター賞 (2025年8月20日)	アリニンの (e,2e) 電子運動量分光
佐々木 徹 (D3) 大島・山崎研究室	Key Species in Atmospheric Chemistry and Astrochemistry poster award (2025年8月14日)	Development of a model potential for coupled intra- and intermolecular vibration and IR-UV spectroscopy of the benzene-methane complex

受賞者名	受賞した賞 (受賞日)	受賞題目
佐々木 徹(D3) 大島・山崎研究室	台湾理論計算分子科学学会 (T2CoMSA) 優秀ポスター賞 (2025年8月22日)	Implementation of Adiabatic DVR Framework for Slow-Fast Vibrational Analysis
佐藤 梨空(M1) 大島・山崎研究室	日本分光学会年次講演会 若手ポスター賞 (2025年6月20日)	実時間イメージングに基づくナフタレン二量体の回転分光
坂口 颯太(D1) 大島・山崎研究室	第40回化学反応討論会 ベストポスター賞・Chemistry Letters Young Researcher Award (2025年6月6日)	Electron-atom Compton scattering from CH ₄ and N ₂ : Towards atomic momentum spectroscopy study on elements heavier than hydrogen
片岡 舜佑(M2) 大島・山崎研究室	第40回化学反応討論会 ベストポスター賞 (2025年6月6日)	A New Method for Chiral Recognition Using Molecular Orientation and Coulomb Explosion Imaging
Jang Yura(M1) 前田研究室	第14回JACI/GSCシンポジウム GSCポスター賞 (2025年7月16日)	CO ₂ photoreduction using zinc vanadium oxyhydroxide catalysts
政野 紫苑(D1) 後藤・小野研究室	第22回ホスト-ゲスト・超分子化学シンポジウム 優秀ポスター賞 (2025年6月8日)	内部にパーフルオロアルカンユニットを有するオリゴフェニレンリングの合成とフルオラス性評価
岡野 朋博(M2) 谷口研究室	第7回固体化学フォーラム研究会ポスター賞 (優秀賞) (2025年6月24日)	人工的な有機・無機ハイブリッド型キラル半導体の開発とキラル系における光電流物性の開拓
前田 凌(M1) 八島研究室	日本セラミックス協会年会優秀ポスター発表賞 最優秀賞 (2025年5月19日)	ペロブスカイト型新物質の完全水合とプロトン伝導
梅田 健成(M2) 八島研究室	日本セラミックス協会年会優秀ポスター発表賞 黒崎播磨賞 (2025年5月19日)	ドナードーピングにより創製したペロブスカイト型プロトン伝導体の発見
齊藤 馨(D2) 八島研究室	日本セラミックス協会年会優秀ポスター発表賞 品川リフレクトリーズ賞 (2025年5月19日)	本質的な酸素空孔に基づいた新規高プロトン伝導体の発見
山本 真洋(D3) 山下・森本研究室	日本化学会第105春季年会 (2025) 学生講演賞 (2025年4月25日)	ホウ素架橋ヘキサゼンの誘導体化
橋本 淳(M2) 北島研究室	2024年度量子ビームサイエンスフェスタ 学生奨励賞 (2025年3月13日)	水素分子のイオン化しきい値近傍における光電子分光
兼則 祐輔(M2) 八島研究室	2024年度量子ビームサイエンスフェスタ 学生奨励賞 (2025年3月13日)	中性子回折実験により解明した高酸化物イオン伝導性新規オキシハライドの結晶構造とイオン伝導メカニズム
姚 博文(M2) 八島研究室	電気化学会第92回大会 優秀学生講演賞 (2025年3月18日)	Exploration of novel oxide-ion conductors containing rubidium
水落 隆介 (JSPS海外特別研究員・東京科学大特別研究員) 前田研究室	井上研究奨励賞 (2024年12月17日)	酸フッ化物アノードを用いた水の酸化反応

教員の受賞

受賞者名	受賞した賞 (受賞日)	受賞題目
大森 建 教授	Asian Core Program Lectureship Award (Singapore and South Korea) (2025年11月30日)	Site-selective dimerization of oxaphenalenones
齊藤 馨 助教	The 22nd International Conference on Solid State Proton Conductors (SSPC-22), Best Poster Award (2025年9月16日)	Discovery of Novel High Proton Conductors Based on Intrinsic Oxygen Vacancies
福原 学 特定教授	2025光化学協会賞 (2025年9月5日)	感圧化学センサーの光化学: 予防医療への展開
後藤 敬 教授	The 9th Kim Yong Hae Lectureship Award (2025年4月30日)	Development of Nano-sized Molecular Cradles for Modeling Biologically Relevant Reactive Intermediates
作田 祐一 特任助教	日本セラミックス協会年会優秀ポスター発表賞 優秀賞 (2025年5月19日)	六方ペロブスカイト関連酸化物Ba ₇ Nb _{3,8} Mo _{1,2} O _{20,1} の高速イオン伝導とその要因
和田 雄貴 助教	令和6年度手島精一記念研究賞 研究論文賞 (2025年3月17日)	Atomic-resolution structure analysis inside an adaptable porous framework
前田 和彦 教授	令和6年度手島精一記念研究賞 若手研究賞 (藤野・中村賞) (2025年3月17日)	分子を含む固体光触媒を用いたCO ₂ 変換反応
平田 圭祐 助教	第19回PCCP (Physical Chemistry Chemical Physics) Prize (2025年3月27日)	Hydration-triggered molecular functions revealed by cryogenic ion spectroscopy
作田 祐一 特任助教	令和6年度手島精一記念研究賞 博士論文賞 (2025年3月17日)	Ba ₇ Nb ₄ MoO ₂₀ 系材料の発見と二量体を介した超高速イオン伝導機構
森本 祐麻 准教授	手島精一記念研究賞 (若手研究賞 [藤野・中村賞]) (2025年3月17日)	反応活性種の補足を起点とした金属-活性酸素種による炭化水素化合物酸化反応機構の解明
和田 雄貴 助教	AsCA 2024 Rising Star Award (2024年12月5日)	Atomic Resolution Structure Analysis Inside a MOF with Adaptable Water Networks

* 職名は受賞当時のものです

修了後の主な進路

博士課程進学

2025年度13名、2024年度11名、2023年度8名、2022年度8名、2021年度9名、2020年度5名、2019年度5名

修士の就職先 (就職時の社名の記載)

化学・鉱業	マツモト交商	ニューフレアテクノロジー	公務員
アグロ カネショウ	三井化学	パナソニック	気象庁
旭化成	三菱ガス化学	日立製作所	一般財団法人 材料科学技術振興財団
大阪有機化学工業	三菱マテリアル	ブラザー工業	産業技術総合研究所
花王	みどり化学	富士通	その他
関西ペイント	ライオン	三菱電機	アクセンチュア
関東化学	レゾナック	ヤマウチ	アマゾンジャパン合同会社
京セラ	AGC	リガク	キーエンス
クラレ	DIC	ULVAC (CHINA) HOLDING.	スクウェア・エニックス・ホールディングス
信越化学工業	EIZO	金属・機械	住友生命保険
住友化学	ENEOS グローブ	田中貴金属	大和総研
積水化学工業	HOYA	ボッシュ	電通
大日本印刷	INPEX	三菱マテリアル	トヨタ自動車
高砂香料工業	JFE スチール	SMC	日本テトラパック
中国鋼鉄研究総院	JSR	食品・医薬	ビッグツリーテクノロジー&コンサルティング
デュポン	P&G ジャパン	味の素	ボストン コンサルティング グループ
デンカ	TOPPAN	大塚製薬	三菱総合研究所
東京ガス	UBE	カゴメ	みずほ銀行
東京化成工業	電気・精密	第一三共	ヤマハ
東ソー	アンリツ	テルモ	山崎製パン
東洋合成工業	ウエスタンデジタル	中外製薬	楽天
東洋インキSCホールディングス	エリクソンジャパン	ファイザー	JA全農
東レ	キオクシア	森永乳業	
東和薬品	新光電気工業	Meiji Seika ファルマ	
日垂化学工業	セイコーエプソン	通信・運輸・公共	
日産化学工業	ソニーセミコンダクタソリューションズ	ブレインズテクノロジー	
日東紡績	東京エレクトロン	東海旅客鉄道	
日本ゼオン	日東電工	千代田化工建設	
日本触媒	日本電信電話	東京ガス	
日本電気硝子	日本分光	東日本電信電話	
ブリヂストン		JERA	

博士の就職先

研究機関	日本大学	住友化学	富士フイルム
大阪大学	分子科学研究所	セイコーエプソン	マイクロンメモリジャパン
岡山理科大学	理化学研究所	大正製薬	三井化学
学習院大学	北京大学	田辺三菱製薬	三菱ガス化学
慶応義塾大学	一般企業	第一三共ケミカルファーマ	三菱マテリアル
産業技術総合研究所	アサヒビール	中外製薬	持田製薬
昭和薬科大学	出光興産	テクノスデータサイエンス・エンジニアリング	矢崎総業
東京医科歯科大学	大塚製薬	東ソー	レゾナック
東京工科大学	カネカ	日東紡績	DIC
東京工業大学	キオクシア	日本学術振興会	Japan Advanced Semiconductor Manufacturing
東京大学	興和	日本化薬	Meiji Seika ファルマ
東北大学	塩野義製薬	浜理薬品工業	TSMC デザインテクノロジー ジャパン
豊田中央研究所	資生堂	日立製作所	
日本原子力研究開発機構	住友ベークライト		

学生からひとこと

植草研究室 博士課程

岸田 裕子さん



私は東京工業大学(現・東京科学大学)理学院化学系を卒業し、修士課程・博士後期課程へと進学しました。有機結晶を扱う植草研究室に所属し、修士課程までは光によって色が変わる結晶の研究に取り組みました。その中で結晶学をより深く探究したいと考え、博士課程へ進みました。

現在は、不安定な医薬品結晶の構造変化メカニズムの解明に取り組んでいます。進学して良かったと感じるのは、一つの道を探る楽しさを実感できていることです。修士課程までに培った知識や技術に加え、博士課程では研究のマネジメント力、新たな問いを立てる発想力、そしてより深い考察力が身につきます。博士課程で研究テーマを変更したことは、視野を広げ、研究に新しい視点を取り入れる楽しさをもたらし、非常に有意義だったと感じています。また、国内外の学会に参加し、多くの研究者と議論を交わしたことで、プレゼンテーション能力も磨かれ、自分の研究をより高いレベルへと引き上げることができました。

化学系研究の魅力は、物質や現象を根本から理解し、新しい機能や物質を自分の手で切り拓ける点にあります。化学系には多様な研究室があります。ぜひ、自分の興味に合った研究室を見つけ、未知の世界に挑戦してみてください!

石内研究室 修士課程

早川 優里花さん



私は横浜市立大学理学系物質科学コースを卒業後、修士課程から東工大化学系へ進学しました。現在は冷却イオントランプ赤外分光法という手法を用いてイオンを識別する分子のイオン認識メカニズムの研究を行っています。

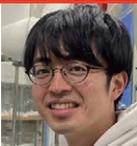
化学系では整った研究設備と先生方や先輩方の手厚い指導のもとで、最先端の研究を行うことができます。また、研究室内では日々の研究進捗を活発に議論することで新たな知見を得ることができます。さらに様々な学会に参加し研究成果を発表させてもらうことができ、高いプレゼンテーションスキルを身につけることができます。この様に、とても充実した研究生活を送ることができます。

化学系では私の様な他大学出身者が多いですが、大学院の講義は化学について基礎からしっかりと学ぶことができるようになっています。

化学系には様々な分野の研究室があります。充実した研究生活を送るために、是非いろいろな研究室を見学してみてください。

大森研究室 修士課程

出山 光一さん



私は九州大学工学部物質科学工学科を卒業後、修士課程から本学理学院化学系に進学しました。九大では発光材料の研究をしていましたが、どうしても全合成研究をやってみたいという思いから、本系への進学を決意しました。現在は大森研究室にて、大環状骨格を有する天然有機化合物の全合成研究に取り組んでおり、様々な合成実験を行うことができ、非常に充実した日々を過ごしています。

化学系の魅力は、非常にハイレベルな研究環境にあると思います。研究設備が整っており、世界トップレベルの先生方や、高い志を持った学生に囲まれて研究できるため、日々成長していくことができます。

外部からの受験を考えている方の中には、進学後、新たな環境に馴染めるか不安を抱いている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。実際、私も進学前は不安でしたが、親切的な先輩・先生方のおかげですぐに馴染むことができました。また、本系の修士課程進学者のうち半数以上は外部出身者であるため、アウェー感はなく、また内外問わず同期生ともすぐに仲良くなることができました。

河野研究室 修士課程

嶋田 光将さん



私は東工大理学院化学系を卒業し、引き続き修士課程に進学しました。現在は河野研究室で、細孔性ネットワーク錯体という超分子構造体を用いたCO₂吸着材の開発に取り組んでいます。

化学系の良いところは、研究室あたりの学生数が少なく、自らの裁量で主体的に研究を進められることです。私の所属する研究室では、1人1人が独立した研究テーマを持っています。自律して研究に取り組むのは大変ですが、先生方

や研究室のメンバーからのサポートを受けながら、現状を把握して必要なものを判断する力や、自ら計画を立案して遂行する力、結果を正確に解釈するための論理的思考力を養うことができます。研究設備も整っていて、計画した実験をすぐに実行に移せますし、時には外部の研究機関に出張して測定装置を使わせていただくこともあります。

また学会にも積極的に参加しています。学会発表では他大学の先生方や学生との交流を通じて、成果を俯瞰して見つけ、相手に分かりやすく伝える能力を身につけることができます。

化学はどのようにこの現象が起こるのか、原理を追求し、世界を理解するための学問です。皆さんも化学系で世界の深淵を覗いてみませんか。興味を持った方はぜひ見学に来て、自分の目で確かめてみてください。

前田研究室 修士課程

森 せいりさん



私は国際基督教大学を卒業後、東工大の化学系エネルギーコースに進学しました。現在は前田研究室に所属して水酸化鉄の多形体を用いたCO₂光触媒還元の研究を行っています。

私にとって東工大の化学系は、自分の好奇心に従って研究できる貴重な学び場です。充実した研究設備で気になることがあればすぐに実験や分析が行えるため、非常に恵まれた環境だと感じています。先生方も、学生の率先して実験を行う姿勢を後押しするため、自分で考えて行動する力を身につけられる最適な環境です。

研究室では皆さん研究に対して熱意を持っていて、学生同士の話し合いが盛んです。躓いた時は親身にアドバイスをいただけるため、一人で抱え込む心配はありません。他研究室との共同研究やセミナーに参加する機会もいただくことができ、交流を通すことで常に新しい刺激を受けることができ、とても充実しています。

どんどん新しいことについて学びたい!自分の好奇心に従って実験したい!そう思っているのであれば、是非あなたに東工大の化学系をオススメします。

豊田研究室 修士課程

福田 大輝さん



私は北里大学理学部化学科を卒業後、修士課程から理学院化学系に入学しました。現在は豊田研究室に所属し、アントラセンなど芳香環を用いてユニークならせん形構造をもつ有機分子を合成しています。

東工大の化学系では、研究環境が整っているため、研究を円滑に進めることができます。最先端の機器が数多く設置されているため、必要な測定をすぐに行うことができます。また、学生の数に対して教員の数が多いため質問しやすく、研究に対するモチベーションが高い学生も多いことから、学生同士でのディスカッションも活発に行われていることも魅力の一つです。

他大学からの進学に不安を感じる人もいるかもしれませんが、しかし、修士課程の学生の半数以上は他大学からの進学者なので、心配せず飛び込んでください。きっと刺激的な日々が皆さんを待っています。

化学系には多くの研究室があります。もし興味のある研究室があれば、ぜひ一度見学に来てください。

火原・福原研究室 博士課程

水野 裕彬さん



私は東京理科大学理工学部先端化学科(旧 工業化学科)を卒業後、修士課程から東京工業大学理学院化学系に進学し、博士課程も同じ研究室に所属しています。学部時代は光触媒に関する研究を行っていましたが、現在は水素結合などの分子間相互作用により形成される超分子ポリマーを用いた化学センサーに関する研究に取り組んでいます。

化学系の魅力の一つに、他大学からの進学のしやすさが挙げられ、直近の5年間では外部生の割合が毎年55%以上となっています。一般的に大学院入試は学部時代の授業を受けている内部生が有利となりますが、化学系では口述試験のみで入学が許可されるA日程があるため、学部時代に優秀な成績を取ることで内部生と互角に戦うことができます。

また、博士課程の学生が多いことも魅力の一つです。教員よりも近い存在であり、なおかつ国や企業から生活費や研究費の支援を受けられるほどにレベルの高い博士学生から指導を仰ぐこともできます。

ぜひ化学系の研究室見学をして教員の話や、学生からの生の声を聞くことで自身にあった研究室を見つけてください。

卒業生の声、同窓会組織“東工大理化会”

阿部倉 優人さん

大塚製薬株式会社

R4年度修士課程修了



私は学士課程で化学系を選択し、修士課程までの3年間、植草研究室で医薬品の結晶に関する研究を行いました。医薬品として課題となっていた低い水溶性を、医薬品と別の化合物を共結晶化することで改善することを目指しました。自ら設計した新しい結晶を実際に作製し、その水溶性が改善されたときには、大きな達成感を得ることができました。こうした成果が得られたのは、指導教員との距離が近く、きめ細やかな議論ができる化学系ならではの環境に支えられていたからだと思っています。

現在は大塚製薬株式会社で医薬品の研究に携っており、大学で学んだ結晶学に関する知識が大いに役立っています。また、研究に取り組む中で身につけた主体性や課題解決力は、現在の業務でも力を発揮する場面が多くあります。化学系での学びは、研究者としての基盤を築くだけでなく、自分自身の成長にもつながります。ぜひ化学系で充実した学生生活を送ってください。

中西 勇介さん

東ソー株式会社 無機材料研究所 研究員

H27年度修士 H30年度博士課程修了



私は、東工大の応用化学専攻を修了後、化学専攻の博士課程に進学しました。修士・博士課程では共に、前周期遷移金属錯体の合成と反応に関する研究を行ってきました。金属錯体の研究が徐々に楽しいと感じるようになり、毎日研究に没頭してきました。その結果、国内外問わず数多くの学会に参加する機会も与えてくださり、そのおかげで幅広い経験を積むことができました。特に、学会先では他大学の学生と交流する機会も多々あり、今となってはとても良い思い出です。

企業に入社後は、大学時代とは異なる分野の研究に従事することになりましたが、研究に対する基本姿勢は同じです。冷静に状況分析をし、自力で改善策を生む力や、結果を整理して分かりやすく伝えるプレゼン能力などの、これまで培ってきた力が現職でも大いに役立っています。

あらゆる状況に対応できる「柔軟な研究力」を、少しでも大学院在籍中に養っておくと良いと思います。そのことはきっと、卒業後の自分のキャリアをより充実したものにしてくれるでしょう！

森川 里穂さん

AGC株式会社(研究員)

R4年度修士課程修了



私は東工大に入学後、化学系を選択し、さらに修士課程(化学系エネルギーコース)へ進学しました。4年生からは八島研究室に所属し、セラミック材料の探索・評価の研究を行う中で、様々な経験を積みさせていただきました。

テーマを自ら立案して、実験や解析の計画を立てて試行錯誤しながら研究を進めていきました。主体的に研究を行うことで自ら科学を切り開いていく楽しさを感じることができました。高度な実験や解析で頂くこともありましたが、先輩や先生への相談がしやすい環境で進められ、終えたときには大きな達成感があります。研究生活の中で実験に必要な技術・知識だけでなく、粘り強さや研究に向かう姿勢も身につきました。大学以外にも国内外の最先端の装置を使った回折実験や、特許の出願、国際学会における他大学の先生や外国人研究者との交流を通して、視野を広げることができました。ぜひ化学系の恵まれた教育環境で、自ら研究を進める力を磨き将来に役立ててほしいと思います。

長岡 麻衣子さん

BASF ジャパン株式会社

H29年度修士課程修了



私は学士課程の頃から関心があった豊田研究室に進学し、新規芳香族化合物の合成と物性に関する研究を行いました。東工大には手厚く指導して下さる先生方に加え、充実した設備等、素晴らしい環境の中で研究を進めることができました。研究の途中でテーマに対してどのように進めていくか悩んだこともあり、とても厳しく感じる2年間でしたが、研究者としても人間としても大きく成長させて頂きました。特に自ら考えて研究を進めていく能力が鍛えられたと感じています。また学校生活ではユニークな友人が沢山おり、様々な面で互いに切磋琢磨し、支え合いながら充実した研究生活を送ることができました。卒業した現在でも多くの仲間と交流を深めています。

現在はBASF ジャパン株式会社で、研究で関心を持った「色」に関する開発業務に従事しています。学んだ知識の全てが業務に直結はしていませんが、これまでの経験が大いに活かされており、改めて東工大で過ごした日々感謝しています。ぜひ、みなさんも東工大化学系に進学し、かけがえのない仲間とともに充実した研究生活を送ってください！

岡崎 めぐみさん

東京科学大学 化学系 助教

H31年度修士 R3年度博士課程修了



私は東工大に入学後、光化学を専門とする研究室にて学部4年生から大学院博士課程修了までの6年間を過ごしました。研究室では、実験の進め方や発表の仕方等、研究に対する基礎的なスキルを身に付けただけでなく、研究の楽しさを知ることができました。日本だけでなく世界的にも活躍されている先生方の下で取り組む研究は、決して簡単なものではありません。時にはまったく進展せず、むしろ後退することもあって大変な思いをすることもありますが、実験がうまくいったときの喜びは何事にも代えがたいものです。私自身、そういった経験を積み重ねていく中で、研究者を志すようになり、現在も楽しみながら研究を続けられています。

化学系は、理論から実験まで多種多様な分野をご専門とする先生方が集っています。化学に興味のある皆様であれば、化学系にはご自身が面白そうと心から思える研究室が必ずあると思います。そして様々なご経験や知識を持つ先生方から直接、講義や研究指導を受けられる環境では、ご自身の教養を深められるだけでなく、幅広い知識や視野を得られるはずです。ぜひ化学系で素晴らしい先生方・優秀な仲間とともに研究を楽しんで、将来へと羽ばたいてください！

鈴木 レオナさん

株式会社ルーデル

令和3年度修士課程修了



私は東工大の第一類に入学後理学院化学系を選択し、4年生から修士2年生まで寺田研究室で火山に関する研究を行いました。具体的には、火口湖水の火山性成分濃度に対して時系列解析を行うことで、単純な濃度測定ではわからない情報を読み取り火山活動の理解に生かすという試みです。化学系の研究室はどれも実験設備が充実していて最先端の研究を行っていますが、火山化学の研究室には独自の楽しさがあります。それは、研究対象が「火山」というダイナミックなものであるところからです。自分で実際に火山に向向いて、手法にもこだわりながらサンプリングをする、それを分析して、さらには物理学・地質学などの知識を合わせる。これにより、直接見ることでできない地下深くで起きることを理解することは、他のどの研究室でも味わえない面白さだと思います。

現在は頭書の会社で働いており、「様々な情報を合わせて多角的に物事を考える」、「自分には当たり前でも他人にはよくわからないことを理解できるように説明する」など、研究室で鍛えられたことが活かされています。

是非東工大の化学系に来て、全力で楽しんでください。その経験は必ずその後の人生でも役に立ちます。

野田 聡さん

旭化成株式会社

H29年度修士課程修了



私は、立教大学を卒業後、東工大化学系の修士課程で有機典型元素化学を学びました。研究室生活では、教授・助教の先生方や先輩方に手厚く指導していただき、研究を進めていく力が身に付きました。また、学会発表についても国内外で多くの発表機会があり、異なる研究分野の方に、自身の研究を正確に伝える力も養われたと思います。

現在、旭化成株式会社で機能樹脂の材料開発から材料使用メーカーへの提案まで行っています。研究開発・性能分析・お客様への技術説明と川上から川下まで、様々な仕事をカバーするために、研究推進力と研究・材料に関する説明能力が必要とされます。大学院で身に付けた研究を進める力と伝える力は、日々の業務の中で非常に役に立っています。

東工大は、どの研究室も最先端の研究を行っており、優秀な学生ばかりなので自分自身を大きく成長させることができる環境だと思います。是非、東工大で研究の基礎を固め様々な舞台上で活躍できる研究者になってください。

江尻 智一さん

セイコーフューチャークリエーション株式会社

H30年度修士課程修了



私は東工大理学部に入學後、2年次に化学科に進学し、4年次から修士課程2年までの3年間、北島研究室にて研究を行いました。研究テーマは、研究室独自の実験装置による化学反応過程の観測を目指すものでした。大変なことも多かったですが、元々化学反応のメカニズムに興味があり化学を志した私にとっては非常に面白い研究でした。時には高エネルギー加速器研究機構の放射光を利用して実験することもあり、企業での研究開発では得難い経験をすることもできました。

現在は、頭書の企業に所属し、セイコーの機械式腕時計に使用される金属材料の研究開発に携わっています。化学を直接的に扱うことはない分野ではありますが、主体的に仮説・検証する能力や、機器分析の原理や理解、化学の専門知識や考え方など、大学院で培ったものは今でも非常に役に立っていますし、やりがいのある仕事もできています。

化学系を目指すみなさんには、化学系の恵まれた環境や設備を活用し、思う存分化学を探究していただければと思います。

佐近 彩さん

製薬会社 研究員

H24年度修士 H27年度博士課程修了



私は大学院博士課程に進学し、植草研究室で機能的な性質を持つ物質を結晶構造の観点から設計する研究を行いました。溶媒蒸気によって可逆的に色が変わる(バイポクロミック)物質を有機結晶で実現し、その変化のメカニズムを分子レベルで明らかに出来た際には非常に感動しました。

現在は製薬会社の研究員として医薬品の研究・開発を行っており、大学で主に学んできた結晶学や物性評価の知識が役立てられています。また、大学時代から研究内容が変わっても、研究室で身に付けた、主体的に研究を行う姿勢や研究の進め方が非常に活かされているということを実感しています。

化学系という研究を行うのにすばらしい環境で、自由な発想を持って楽しみながら研究を行ってください。

宮川 晃尚さん

筑波大学 数理物質系 助教

H29年度修士 R2年度博士後期課程修了



私は外部の大学から東京工業大学理学院化学系の修士課程へ入学し、博士後期課程修了までの5年間、分析化学の研究を行ってきました。研究室に所属した当初は周りの学生やレベルの高い研究についていけるか心配でしたが、研究室の先輩・同期・後輩はもちろん、先生方の手厚いサポートのおかげで楽しく研究を行うことができました。修士課程の最後には、自分の研究に誇りを持ち、難しい質問にも自信をもって答えられるようになり、さらに研究を続けたいという思いから博士課程に進学しました。

東工大化学系の最大の特徴は、最先端の研究に参加できるだけでなく、研究の本質的な楽しさを学べる場所だと思っています。自分の発想した実験や研究を自由に挑戦させてもらえるため、それが結果につながったときは自分の成長を実感できるとともに、自分の手で研究を進める楽しさを知ることができます。このような環境で培われた知識や研究力、論理的思考力はこの先、社会に出たときに大きな力になると 생각합니다。皆さんも東工大化学系で充実した研究生活を送ってみて下さい。

中澤 雄一郎さん

カゴメ株式会社

H29年度修士課程修了



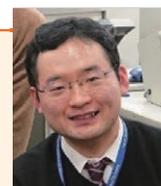
横浜市立大学を卒業後、東工大化学系の修士課程に進学し、江口・工藤研究室では、微生物が生産する抗生物質の生合成研究を行いました。開始当初は、学部時代には学んでこなかった研究分野であったこともあり、なかなか思うように成果を挙げることが出来ませんでした。先生方には最後まで熱意を持って指導して頂きました。専門知識のみならず、研究者にとって一番大切な、研究に取り組む姿勢について教えて頂いたことは大変貴重でした。そして、研究に対して熱い情熱を持った研究室の仲間達と、納得がいくまでとことん議論し、切磋琢磨し合った日々も忘れられません。

現在はカゴメ株式会社の研究員として、食品に関する研究を行っております。修士時代の研究分野とは異なる分野であっても、自信を持って研究業務を進めることが出来るのは、やはり東工大化学系で研究に打ち込んだ修士時代の2年があったからだと思います。

松下 龍二さん

日本学術振興会

H24年度修士 H27年度博士課程修了



私は理学部化学科から化学専攻の修士課程・博士課程に進学しました。学部時代を含めた6年間の研究テーマはナノスケールの系の物性計測を通じた原子・電子構造解析です。卒研配属当初はわからないことだらけでしたが、いろいろと調べたり、様々な方々に知恵を借りたりしながら自分なりに考えて研究を進めたというのは、大変良い経験であったと思います。

現在は化学から離れ、日本学術振興会で事務職員として働いています。業務で化学の知識を使うことはないですが、東工大での研究経験があるごとに生きていけると感じます。資源の少ない日本にとって、分野を問わず多様な知恵を出し続けることはとても重要なことですが、その源泉たる「学術」の振興に、行政という立場から微力ではありますが尽くしていきたいと思っています。

東工大理化学会より

「東工大理化学会」は、東京工業大学の理系化学の同窓会組織です。化学系、化学専攻、物質科学専攻(理系)、化学科の卒業生および修士課程修了生の中で、本会趣旨に賛同し登録した者を会員とし、ネットワークを基本とした組織運営を行っています。情報ネットワークを通じて会員の意見を集約・共有しながら、同窓会と

しての連帯感と活力を高めることを目的としています。詳細はホームページ

<http://www.chem.titech.ac.jp/alumni/>

をご覧ください。今後卒業する皆様には、是非「東工大理化学会」にご登録の上、同期生・同窓生の連帯感醸成、情報の共有などに本会の人的ネットワークおよび情報ネットワークをご活用下さい。

化学系教員マップ

南5号館




405A 寺田 405B 野上

西4号館





105B 大島 107 西野 410 八島





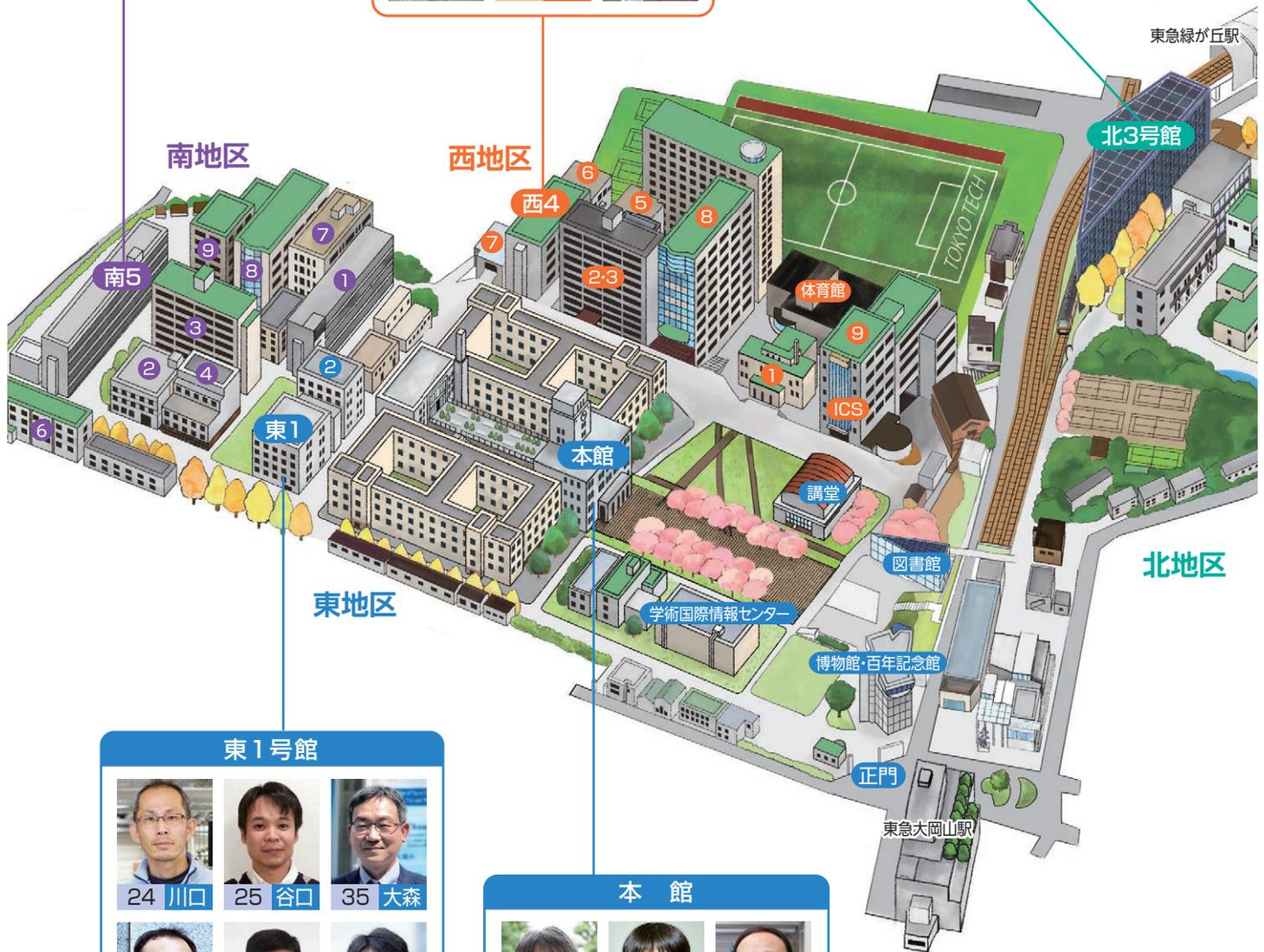
510 ユーハス 503東 北島 609 火原

北3号館





604 近藤 605 河野 702 前田



東1号館





24 川口 25 谷口 35 大森





36 安藤 44 山下 44 森本




54 豊田 55 南

本館

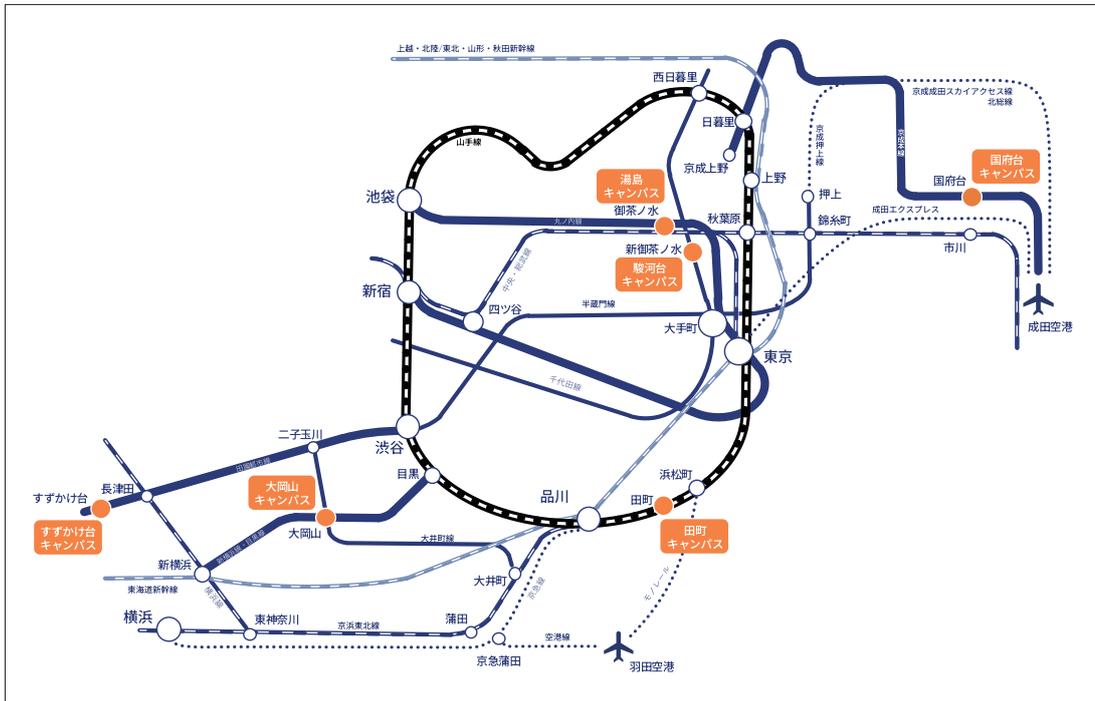
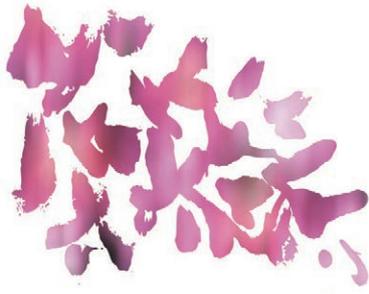




B02B 植草 B02C 小野 B18 後藤




B19 石内 117 沖本



Department of Chemistry

School of Science

化学系事務室 (大岡山キャンパス本館1階132号室)

〒152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1 H-58

TEL : 03-5734-2660 E-mail : jim@chem.sci.isct.ac.jp

<http://www.chemistry.titech.ac.jp/>